明治三十年一月十日

# 女學雜誌

第四百卅三號

# 第四百三十三號目次



# 社告

◉本誌は毎月二回即ち十日、二十五日の兩日を以て發行す

◉十日發行の分は稍や簡易實際を專らにし、第一、家庭の整理改善に益ある事項を主として、其他、文藝、史傳、問答等の諸欄に重きを置き、二十五日發行の分は、女界教界に對する吾黨多年の主義を發表するもの。

○本誌の定價の割合に廉ならざるは、特に遺憾とする所なり、然れども事務に迂なる吾等の事業に於ては之を如何んともすること能はず。即ち、定價は元の如く、一冊無郵税十錢に定むべし。

○單に十日發行の分のみを購求せんと所望せらるゝものあらば、其望に應ずべし。

## 女學雜誌定價表

| | |
|---|---|
| 前金 | 一冊定價　金拾錢（無郵税）　一ヶ年前金　金貳圓 |
| 廣告料 | 一行　同廿五字詰　前金十錢　同三回以上一割引　同六回以上二割引　但し不當なる廣告は謝絕す。懇意の廣告は相當の無代價にて引受く |
| 送金 | 爲替は東京郵便局宛、郵便切手にて送る人は五厘切手にて小爲替に代へし且つ一割増を添ゆべし |
| 注文 | 注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社に於て申越さるべし |

# 第四百三十二號目次

恭賀新正

女學雜誌社員一同





女學雜誌

第四百三拾三號

明治三十年一月十四日發兌

## 社説

### 四方拜

むかしは、二宮報徳先生、三つの徳に報ゆることを要とす。一に曰く、天地の恩、二に曰く、君主の恩、三に曰く、父母の恩と。

こゝに、天地の恩と云ふもの、尤とも深く感激すべし。吾人、つら〳〵惟んみるに、人間成す所の十中八九は、悉皆、天地覆載の惠むところに由る也。一草一木の培養も、人力を加ふべき場所は極めて少なし、一粒の米の三十倍乃至六十倍となるは、必竟、風土の化力に由るにあらずや。山河の景色、人心を影響し、地理の向背は國史を支配す。山によつて、文明を固定し、水によつて、文明を流布す、亦これ天地の攝理にあらずや。所云ゆる偉大なる人は、其の偉大なるほどに、天地の感化を蒙ぶる。詩人は風景によつて生れ、農工は、自然を採つて産す、總じて天地の恩を蒙ぶらざるはなし。

かの自から成せりとして、驕然として獨り奢る族のあはれさよ。人は、自己の小なることを知るによりて初めて稍や大となることを得べけんに。眇たる一身を引延し、些々たる事業を衒意にして、傲揚として天地に誇らんとす。天地眼あり、もしこれを瞥見することをたゞに爲さば、如何に其姿の阿呆らしく、其見識の不愍なるらん。人類の爲めに竊かに之を念ふときは冷汗、背に流れて寒きを覺ゆ。

古の聖賢みな吾等に敎ふ。須からく自然なるべしと。自然とは、我を沒して、天地に順從することこれ也。即はち知る、人いよ〳〵修めて、いよ〳〵天地に歸へることを。天地は親の如し、人は其の子なり。年少自から恃のみ、時として放蕩息子の如く家を忘るることありといへど、遂に亦た其の親に復歸せざるは稀なり。天地の恩、安くんぞ忘ずべけん。

則はち、恙がなく一歳を送りて、平かに新年を迎へ、深く天

地の恩を思ひて切りに感激し、盡しみて四方を拜す。四方拜の御禮、あに當日にすべけんや。

## 積善の家餘慶あり

積惡の家に餘殃あり、積善の家に餘慶ありとは、古來久しく人の聞く所なれども、單に金言として敬して遠ざけ、實地の覺悟となすもの多からざるが如し。然し乍ら、人情世態の實相を通觀し、榮枯得喪の跡を仔細に吟味すれば、先哲の訓戒着々中りて、規律苟しくも假す所ろなし。惡を積むと善を積むとの結果は、儼然相別れ、證跡歴々として掌に指さす程に明白ならずや。

玆に其の成行を略記して、始末の筋道を示さんに、かの潺湲たる小川の細流すら遂ひに海に入らずんば休まざるの理を視て、先づ其の由縁を察すべし。第一に親が其子に遺傳するは生理上の善惡なり。抑そも、人事の成敗は過半身體の強弱によることなるが、其の強弱の元因は十中八九、親の遺傳にあり。瘋癲白痴が、親の惡病の結果たるとは論ずるまでもなく、親の勉強、不勉強、養生、不養生、好品行、不品行の結果は、悉皆子女の身體に顯はれて其の影響を遺さゞるとなし。生れ乍ら、惡疾を受け、次第に其の禍を長じ、成人するに隨がひて追々不幸を增加するは人生の大恨事なり。當人もと何等の罪あるにあらず、たゞ親に遺傳せられたるによりて此の災難を負ふとは、悲慘の事ならずや。左れど、これ積惡の家餘殃あるの天理にして、區々たる才覺をもて免れがたきを如何んせん。

又、人の出世不出世は、多くは其の愛相によるものにて、氣品氣質の善惡之が根柢を爲すものなり。然るに、品質の愛想不愛想は、主として親の遺傳、もしくは家庭の薫化に由來し、學校教育などにて左右せらるゝとは至つて薄きものなり。況んや、愛相の過半は人相によるものにて、此の相貌の如何んは、親の遺傳の外致し方あるべからず。女子は言ふに及ばず、男子にても、其相貌の惡さげにて、一見、人を反撥する如きものは、生涯のうちに非常の損を蒙むるべし。然るに此の相貌の遺傳は、半ばは親の顏色と、半ばは親の心構へとより結果したるものにて、つまりは全く親の遺傳したるもののゆゑ、當人が自力にては、如何んとも爲しがたかるべし。

氣質の陰陽、厭樂などが、人事の吉凶に大關係あるは論を待たず、大にしては、主義の撰定、哲學の方向に至る迄で、大抵は氣質の相違によりて定まるものなるが、此の氣質の固定も多分は親の遺傳によると云ふ。家に善を積むと惡を積むとの結果に大懸隔あることを知るべし。

世に天才なるものあり、生れ乍ら知るものにして困學究知の輩とは異なる。天才の爲す所は自から妙に達し、尋常の人決して企だて及ぶべからず。奇想天外より落ち、妙伎地底より湧き、絶品として世界を驚ろかすとのあるは、大抵、天才の成す所ろなり。然るに、此の天才は親叉は祖父母の遺傳により、一二の血統を經て、泉の迸ばしるが如くに噴出したる自然の結果なり。かの老翁老嫗が、寒燈の下に貧苦を忍び、孤忠を守りて正義に殉じたるなどの一生涯は、只夫丈にて無益の最期となりたるが如けれど、實は決して然らず。此の心傳はつて子孫に遺り、生れ乍らにして其の天稟となるときは一世の烈士を出して忠孝節義、人を感奮せしむるものあらん。即はち、積善の餘慶なり。稀代の才能を有ちながら空しく世に埋もれたる、絶世の美術心を懷きて山河に漂泊せしなど、



人たゞ其不幸を歎じて、喩へば彗星の去つて復た還らざるものと同樣に見做すものあれども實は決して然らず。彗星も亦た還るべし、此等偉拔の力量は空しく消るものにあらず、必らずや後世に遺傳して其の結果を顯はし、意外の地に餘慶の實を示して、天命昭々の應報を來さん也。

凡そ此等の例證はわざと解釋を間接の事柄に採りたるとなるが、事の直接なるものに至つては、賞罰いよ〳〵嚴明にして因果の則苛くも破るべからず。善惡に伴ふべき殃と慶とは早晩必らずや到來するとを見ん。天地の經綸に於ては、千年も猶ほ一日の如し。一日を千秋とも心得る人の眼中にこそ賞罰の應報の不定には見ゆるなれ。一度び放ちし矢の何處にか到着し、僅かに撹動せし水の必らず波紋を起すとひとしく、人事の善惡は、必然其の結果を遺す、これ千古嚴然たる宇內の規律なり。

人心の感應はまことに微妙のものにて、知らざる間に他の行跡に相應する當然の感覺を引起す。これと云ふ事のあらざるに、何となく其人の慕はしく、これと云ふとのあらざるに何となく其人の忌々しきなどは、眞に不可思議なる人心の反映

なり。一年二年の評判は馬鹿々々しき誤解、買かぶりなどに由來するともあれども、夫は亦た知らざる間に消滅すべし。十年の一と昔し、三十年の人一代を經過するうちには、赤誠の感應いやちこにして、些々たる虛飾の泡沫も効験なきとを證明すべし。故に、人もし誠實慈悲の心掛をもて公共の實益に努力し、功を十年以上に期して、寧むろに積善の行を爲すとあらば、餘慶子孫に遺りて之を洪福の身となすべし。人もし將來十年の事を漠然なりとせば、顧りみて過去十年の事を追懷して、靜かに人世の因果を觀ずべし。善惡應報の實、歷々として眼中に映ずるにはあらずや。試みに、三門五戶の家に就きて、其の吉凶禍福を念ふに、不思議に好運の人あると共に、氣の毒なるほど不仕合の人もあり。天命の是非、人生の幸惡殆んど取とめなきが如し。然し乍ら、よく／＼其の過去、現在、未來の三世を通觀するときは、この疑ひの太はだ淺薄なりしとに氣着くなるべし。好運の人は、祖先の遺德に感謝して、見えざるの重恩を忝けなきとに思ひ、切めては、其の運命を吾一代にて取盡さんとせず、更に善行を積みて後代に遺さゝる可らず。これ一つには報恩にして、二つには、親の慈悲なり。又、不仕合の人は、たゞ徒らに薄命を怨まずして、吾は創業の艱難を盡すものと勘辨すべし。熟田を耕やすものゝ勞少なきは、父祖に讓られたる土地なるが故のみ、新たに開拓するものは、岩を割り、木の根を堀上るの勞苦を避けがたかるべし。吾は創業の爲に斯く骨を折るものなりと覺悟せば、其の骨折は即はち貯金にして、すべて子孫に遺傳するの積善にあらざるとなし、抑も何をか怨み、何をか歎たんとするや。

茲に新年を迎へて、新らしき覺悟を起す。家相應の祝ひ事を爲して、祖先の餘德を感謝し、併せて將來の爲に戒しめんとするに際しては、靜かに、積惡、積善の應報を思慮して、人生因果の天則を敬するに及くとなし。

---

きのふけふ昔にきこゆる春の水
まづかさの上の靜や梅の花
六日八日中に七日の靜かな
あけくるや我もつれたち春となる
雪降や紅梅白し花の春
若水に皺影笑ふあした哉

講義

# 正月の遊戯

## ◎歌がるた

正月の遊戯の最も主なるものは、歌がるたにぞある。歌がるたはそもいつの世よりか、ありはじめけん、さだかならず。たゞし、ちか昔よりの流行にて、遠き昔には無かりしこととぞ。歌かるたの起り始めを尋ぬれば、もとこは遠昔より行はれにし、貝合（または貝おほいともいひ、蛤の貝をわりて、左右の片貝に絵などかきて、これを合するなり。）の一種なる歌貝とて、蛤の殻の左右に、歌の上句と下句とを分ち、志るして、（松明の炭などにて志るしたること、伊勢物語に見ゆ。）之を合はする遊びをしたるものゝ變化なり。さてかるたといふは、英語にていふカード（トランプの義）の訛れるにて、傳へいふ天正八年、英吉利商船初めて肥前平戸島に來りて、通商貿易せし以後、和蘭商船來りなどして、彼等國人、初めてカルタ（即ちカード）の遊戯を輸入し、長崎の土人等、之を習ひ傳へたるならん。雍州府志には、元阿蘭陀人之を玩びて、長崎港土人之に效ひしよし志るしたり。其節のカルタは、今のトランプの五十二枚あるとは異なり、四十八枚なりしよし。

今のトランプは紋形四種十三枚にて、一種につき一より十に至る數を以て算するものに加へて、王、女王及兵卒の三種あるなれども、其昔のカルタは、四種十二枚にて、一種につき一より九までは、數を以て算し、之に加ふるに法師、士人及庶人の三種ありしとぞ。また其紋形も今のスペード、ハートダイヤモンド、クラブとあるとは異なりて、劍、青色、酒盃玉の四種なりしとぞ。

而して今用ゐる花あはせなるものは、彼カルタの意匠を變じて採用したるものなり。其數も亦四十八枚あり。其流行いつの世に始まりしか、今詳かならず。故に總ずるにカルタなるものは、これ海外より輸入し來りたるの戯具にして、元來博奕の具なり。我邦の士女が花かるたといへば、あまり高尚なる遊びにてはなしと思ふが如くに、西洋人中にても、正し

き行を好む人は、トランプを遠ざける習ひあり。

扨てこの天正年間以後流行し始めたるカルタの札になぞらへて、もと歌貝にて貝に認めしものを、紙の札に歌の上下句を分ちて志るしたるものこれぞ今の歌がるたなり。歌がるた、歌貝昔は百人一首に限りしよし、元來之を弄んで歌を記臆するが主意なりしが如きも、今は其主意頓に失せて、たゞく之を弄ぶ技の巧拙を競ふことゝなれり。歌貝またすたれて、之を見ず。なほ歌がるたも百人一首には限らずなり、伊勢物語、源氏物語、古今集、拾遺集、後撰集、詩句などをも志る志たるあり。而し尤も廣く弄ばるゝは矢張り百人一首なり。」百人一首の歌がるたは、板木に彫りて、種々美しく製へられたるもの、今の世には多し。志かれども其昔には、京都の貧乏公卿が、内職として、文字を志るし、繪を畫きなどしたるものなり。さる方の製造に成りし古雅なる歌がるたは、今も間々見受けらる。

トランプは、日本製のものもあれども、紙質惡く、海外輸入のものならでは、用ゐがたく從つて廣く行はれず。花かるたは、今日の社會のいたましき風俗ゆゑにや、需用甚だ多しと見えて、之を手内職に製造するもの尠なからず。

因に云、英語にては紙の四角に小さく断ちたる札を稱していづれも、カードといふ。假令ば薬書、切符、名刺、クリスマス、カード、トランプの如し。かるたなる語は、多分英語カードの訛りたるものにて、紙の札を用ゐるが故にかくいふ。支那文字にて、かるたを骨牌といふは、象牙の類を牌につくりて用ゐるが故とかいふ。

## ◎雙　六

雙六とは、目を盛りたる盤の上に、筒の中に入れたる賽を振り出して、勝負を爭ふの遊戯にして、もとこれ博奕の一戯なり。この戯は、我朝にてはいつの昔より行はれそめけん、元來天竺より傳はり來しものゝよして、涅槃經に波羅塞戯といへるは、此事なりとか。支那にては、魏の曹植の行ひはじめしとか。何の世、何處の國にても、惡いいたづらはやまぬものと見えたり。我朝にては、持統天皇、孝謙天皇の御宇に、雙六禁制の命令を出されしことありといへば、此戯の流行いと古き事なるは、知らるべし。かの伊勢物語に見えたる惟喬

の親王は、小野宮といへる御殿をば、雙六のかけものに取られしなりといひ、白河法皇は、我心のまゝならぬものは、雙六の賽と、鴨川の水と、山門の僧となりとかいはれしを見ても、雲の上にも、之を弄びたりしとの一端を知り得べし。然るに今の世には此遊び頓に廢れて、今の雙六は即ち繪雙六専らとなれり。繪雙六は支那には舊くよりありしよしなるが我邦には、二三百年以前より初まりて、淨土雙六とて、地獄極樂の繪を畫きたるが、最初の繪雙六なりとぞ。其後に野良雙六、道中雙六などあり。近松門左衞門が『丹波與作』の淨瑠璃に、三吉が道中雙六打つて、丹波の國の一城主由留木殿のお湯殿の子調べの姫に東海道中御勸めいたせしといふとあり。近き頃までも雙六といへば、道中雙六が第一なりしも此頃は様々の雙六出來、戰爭雙六、周遊雙六、教育雙六、海國雙六などあり。中にもをかしきは某博士の創案とかいふ哲學雙六なり。

## ◎紙鳶

正月男兒の遊びは、紙鳶に志められたり。寒風に吹きすさまれ、手に胼をきらせながら、我が紙鳶、最も高く昇れりと競ひ、果ては雁木てふものにて、糸の切合をなす。冬春の候は風空を吹くによりて、紙鳶を飛はすに最も宜しき折なりとす。尤も國々の風俗によりて、紙鳶を上すこと必ずしも春に限らぬもあり。紙鳶の名稱關東及四國にてはたこといひ。關西にてはいかといひ、西國にてたつ、ふうりう、上野及信州にてたか、奥州にててんぐばた、長崎にてはたといふよし。昔は烏賊の形を小く紙にて造り、長閑き春風に上せたるものといふ。元祿時代の古畫を見るに、今の如き角なるは少く、多くは鳶、烏などの形して小し。今の如く大く四角に、様々の武者繪など描きたるは、近昔よりの事なり。西洋の紙鳶は我國のに比ぶれば單純に、形は多く菱形したり。

## ◎羽子板

羽子板は古へよりして、正月の女兒の遊びとなれりしもの、今より五百年以前既に行はれしといふ。昔は之を胡鬼板と稱し、羽根を胡鬼の子と唱へたり。もと〳〵蜻蛉の蚊を食ふ事より、羽根を蜻蛉に擬して、蚊やらひの爲に之をつき上げしものなりともいふ。されば羽子板其創めには夏に用ゐられし

ものか。古へは羽子板粗末の製造なりしが、徳川時代に至りて、之に押絵などはりつけて、様々美しく製造せられ、年の暮に其年生れの女兒の祝に贈ると、男兒に破魔弓贈るとおなじ。關西某の國あたりにては、柱かくしのやうなる形したる板に絵を描き押絵を貼付け、これに羽子板、破魔弓など附けて、産兒の祝に贈る風習あり。

羽子板の押絵、昔は鏡に映りたる姿に擬したるものゝよしにて、それ故今なほ羽子板の寸法を呼ぶに、大中小鏡などいふ。文化文政以後より羽子板の押絵流行し、後に役者の似顔を造りて、評判よく、それより後今に至るまで歳の市の賑ひは、其一年の當り芝居の扮粧したる俳優の似顔ある羽子板にとゞめたり。追羽子にうかれて、遊冶郎乃至紳士の顔のお白粉、藝妓乃至令嬢の顔の墨なんど、松の内はをかし。

## ◎手鞠

大昔には手鞠なかりしやうにて、鞠の遊びといへば、蹴鞠の事にて、殿上人の間に盛んに弄ばれたりき。其後何の頃よりか手鞠なるもの出來、正月女兒の遊びの一となれり。蹴鞠は藤原氏の時代にいとも盛りなりしと見え、『古今著聞集』にも蹴鞠てふ一題目を立て、之に關する著名の見聞を記しあり同書に此事を賛して、蹴鞠の逸遊は、前庭の壯觀なり、文武天皇大寶元年に、此興まじりけるとかや、白砂の上、綠樹の蔭、二大對陣、殿翼相當、盛興盡し難きものなりといへり。誰何人もよく知れる、中大兄が蹴鞠に履脱げて、鎌足之を捧げたるも、此技にあづかれる最も著名の逸事ならんか。然るに藤原氏の權勢と共に、此の遊びも追々に淋びれ行きて、今は外國より傳はりたるフートボールの此遊の昔を忍ばしむるものあり。扨て手鞠といふも、昔は鉋屑などを心にして、綿を被せ、糸を卷きて、上に色々の糸もて、様々の摸様を繡ひ取りたるものゝみなりしが、外國よりゴム鞠傳はりて、專ら處女子の愛玩を受け、なほまたゴム鞠に毛糸の袋を着せるとあり、或は風船球のゴムをふくらかして、色糸を卷きつけたるも喜ばる。此の手鞠の花やかに美しきは、多くは柳の枝になり下る境界となり、可憐の少女が掌中の玉とし、慈しまれぬも哀や。されば、此頃の手鞠は、主として外面の美きを主として、實際つくとの出來ざるものとなれるは、これも世の浮

沈轉變なるらん。

また正月の遊びと限られたるにはあらねども、外國より輸入されたるベース、ボール、クリケット、玉突、テニス、また先にもいへるフート、ボールの如き、蹴鞠廢れて、千年の今日其形を變じて再現して、所謂彼の前庭の壯觀、盛興謳し難からしむべきの、愛玩を得んとするものか。

* * * * * *

以上數種の正月の遊戲の外、いと早き昔には、男兒等、毬杖及ぶり〳〵といへるものを遊しよし。毬杖は、もと打毬の變形にて、堅木を玉の如くし、之を椎の形したる杖にて打ち遊ぶなりとぞ。其遊び樣は、多くの男兒、間を十間ばかり隔てゝ双方に分れ、そのなかばの地上に、線を引きてかぎりとし、一方より玉を地上になげめぐらすを、一方より椎もて打ち止むるを、得うちとめで、線より外に、玉逸れなば、玉なげたる方の勝にて、打方の負なり、之に反して、線以内にて打ち止むれば、打ちたる方の勝にて、投方の負なりとぞ。又或時代にては、京都の俗として、小兒（男女とも）生れて初の正月、母方の親里より、毬杖を贈るの風習なりしとぞ。ぶり〳〵は、田の土をこなす碌碡といふものに擬して作り、小兒に農事を敎ふるの心にて創まりしものといふ。始めは、これに繩をつけて、地上を引きて遊びしものゝよしなるに、後に至りて、毬杖の附屬となりて、彼玉に代はるものとなりしとぞ。此等今全く廢れて見るべきやうなし。

## 家庭

### 太陽曆の家庭

觀ずれば夢の世、觀ぜざるも亦夢の世に、戯中、至誠を凝らし、舞臺に涙を灑ぐ、人生必竟糾なへる繩の如し。哀傷と、歡樂と、只其一つに偏すべけんや。除夜に隣りて元旦あり、債鬼福々しく笑ふ。もし夫れ、俗界の爭鬪に、家庭の慰籍なかつせば、人何をもて堪へんや。家庭の慰籍に和樂の遊戲なかつせば、人何によりて慰みとせん。勉強の痛苦を味ふ者は戯遊の面白味を感ずらん。質實眞面目の族にして、始めて同

一〇

もに戯むれを語るべし。家庭に團欒の娛樂を主張するは、此の主旨なり。

夫れ、一家打寄りて樂みの宴を開らき、親子長幼、席を一つにして心置きなき睦ひを催す時ぞ、人生此上なき幸福なめれ。風は空に吹き、木の葉は簷下に散れども、家の内の長閑けさは、盛春の如し。人々悅喜、滿面笑をふくむ。天使遊樂のけしきとは、大方此樣の趣きなるべし。

こゝをもて各國夫れ〳〵に祝節を定め、其の日を神聖にし、大切にして、敢て褻りに破らず。萬戸千門一樣に、之を重んじて、即はち、人々總べて同一に歡樂するの機會とはなす。此の日、狡猾なる取引を以て營むるものもなく、此日、嘲を飛ばして相爭ふものゝなし。國旗、おだやかに翻へり、和風おもむろに吹て、東西南北、唯々として悅ぶものにあらざるはなし。即はち是れ國民天國を開らくの日なり。

西洋の文學者輩しかの地のクリスマスの光景をうつすや、先故より傳はりてゆかしきに、其文亦妙にして、坐ろに讀む人を動かすものなり。彷彿として、其の形狀を想へば、家の男兒は、學校の休暇によりて歸り、女兒女學校より歸り、父母、門によりて之を待ち、犬は尾を掉りて飛びつき、下男下女、一齊にチヤホヤ志、豚の頭、七面鳥の肉、すべて式の如くテーブルに陳ぜられて、一年最大の祝賀は崇嚴に快活に趣味多く執行せらる。人生の快事、何ものゝ能く之に及ぶ事かある。

西洋のクリスマスは、我國の元日なり。元日の嚴めしくして而かも樂しき儀式は、固より、彼の地の風俗に劣る可くもあらず。もし亦文學者の堪能なる人ありて巧みに之を寫さば、外國の讀者はさこそ興味多き事にして愛讀するなるべし。人往々、年を越えて而も一新の機轉をせず、何ほ鬱として舊年の如く、もしくは小理窟を唱へて、式日を重んぜず。こゝを以て、元日の小日和も、門松のうらゝかなるも、〆繩の神さびたるも、裏白の清々しきも、總べて愛嬌を引くに由なし、かゝらん人の眼には、浮世の趣味といふものは如何に映つるそや、歎かはしき事なり。すべて、一國萬民の祝の日には、たゞ幼な子の如く無邪氣に歡びてこそ、人生は樂しくあるなれ。一新したる正月氣象を以て、家の飾りと、人々の壽きを見よ。此の祝節の如何に面白く、如何に風雅なるや。

差し、斯る折節に一家團欒の歡樂を盡すときは、其の紀念は永久に續き、其の感化は一生に行渉たり。行旅に出でては、家を念ひ、年老いては故人を慕ふなど、凡て家庭に屬する優しき心根は、すべて此邊の習養に淵源するものなり。故に、むかし陰暦を用ふる比には、一年、四時、八節、二十四氣、七十二候を分ち、就中、十六の佳節を重んじて、取分、五節句の祝ひを大切とし、其日は、一國三千萬、戸々の人々、欣喜して之を賀しぬ。而して、其の節句、氣候の別ちは、總じて天然の寒暖、花月の開閉などに隨かひて取きめたる物故、祝ひの日は即はち賞翫すべき風景あるの場合ゆゑ、端午に菖蒲を念ひ、七夕に天の川を望み、中秋に月を看、重陽に菊を賞するの類、連感の詩想優美ならずといふことなし。而かして、先祖代々、此の節、此の時に歡樂したるとゆゑ、馳走の鹽梅、遊山の次第まで、悉くこれ歷史的の趣味を生じ、ゆかしきの情言ひ盡しがたき程にてありき。

然るに一朝太陽暦となりて、晦日に十五夜の月忽然として中天にかゝり、歷然たる大祭祝日に何の花月もなく、旗を出すものもあれば、出さぬものもあり、折角、折目正しく祝賀せんとする處へ、續々用談を持込まるゝなど、殺風景も亦甚だしと云ふ可し。獨逸の英雄ビスマークは、明治政府が斷然改暦したる猛手腕を歎賞したるよしなるが、餘の事は扨て置き、家庭の祝賀と、團欒の風流との爲めには、此の改革は少なから凶害を與へたり。

然りとて如今最早致し方はある可からず。必竟は、新暦の大祭祝日に未だ慣れざるの致す所にて、凡そ物の新らしきは、何事にても、床かしからぬものゆゑ、速かに之に慣れて、之を故るくし、以て其の有難味を生ぜしむるの外はあるべからず。其法他なし、初めは勉強してなりとも、大祭日を祝はふの工夫に盡力することと是れなり。ましてや、今の幼少に取りては、太陽暦必らずしも新らしきにはあらず、之を新らししとして、未だ慣れざるの不快を感ずるは、長老のみの事なり。而して、家庭祝賀の感化を蒙むらせたしと思ふは、取わけ今の幼少者の上にあることなれば、長老は即はち眞面目に今の大祭日を尊敬し、之を樂むこと昔しの五節句よりも猶ほ優れるものとし、隨がって今の幼少者に之を樂しましむるの工夫肝要なるべし。

凡そ清潔なる遊樂は決して人生の損害とならぬもの也。よく遊樂するものにして、初めてよく勤勉すべし。況してや、家庭の遊樂に於ては、百の利福ありて、一の損害なし。成るべく、之を隆にしたきものと思へど、人々夫々の用向ありて、年中頻りに遊ぶことも出來まじ。但た、如何なる職業を執る身分にも同様休業して差支へなきは、即はち大祭祝日にてあることゆゑ、此上は、此の祝日を以て昔しの五大節句同様のものとなし、人々心掛けて之を神聖にし、此の日は別段の差支なき様に致し置きて、一家必らず團欒する様にすべし。赤の御飯を焼くなり、目出度き肴をつけるなり、打こぞつて遊山するなり、皆な夫れ相應の和樂をなすべし。而して年中の習慣は、年頭の約束によつて成るものゆゑ、如今正月の祝ひに面白く、一家親戚打集ふとの熈はなる此頃の場合に、しかと取きめ、年中の豫算を構へて、今の内に豫案を定め置くべし。古人言ふ、人生は行旅の如しと、花開かば夜、燭を照らすも遊ばざる可からず。惟ふに、一家團欒の樂しみ如何許りか嬉く可き、長幼の齢定めかたし、溶け易きは雪に似たり、惜し其樂む可きに樂み、語らふ可きに語らざれば、一朝幽明の境を異にして、遺恨、何ものに向つてか慰めん。むかし一休大和尚は、門松のほとりに御用心御用心と言ひぬ。余は、年頭祝儀に樂しみを催うして、人生の歡樂の長からんことを祈る。たとひ、大觀し去つて夢の如しと言ふとも、夢に苦吟するは佳きとにあらず。吾儕は、同胞の家庭に祝福の多からんことを望むもの也。

## 一家經濟の整理

去年一歳の出納を吟味して存外の入用に驚ろき、物價も非常の騰貴なれば只管ら儉約の外なしとて、ことしは何割方節減せんなどと思込み、年頭早々憲法を改正し、一家の豫算を削減せんと工夫せらるる向もあるべし。斯様なる時は、主人たるもの、一家の加減大抵は些細の所に切り込み、行はれもせぬ小節目に修繕の修正を加へて、肝腎の急所を圖面にする癖のありがちなり。蕃山公も言ひし如く、改革は行はれ易き所に行ふが秘訣なれば、主人たるもの率先して自から儉約し、先づ、其車代、小遣、衣服料の如きものを切りつめ、而して、

細君又は下婢の關係する部分は十分優かにし、舒むろに其の養心の根本を刺激して、彼方より自づから倹約し初むるの工合に趣むかせずば、幾多の方案を立つるとも皆無益有害となるべし。亦た、一家の經濟を整へんとするに際しては、家内の和合を第一とし、品物を倹約して不自由を忍ぶの傍ら、家中團欒の樂しみに滿足し、銘々競つて分擔盡力するの形勢たらしめざる可らず。之を一家經濟整理の根本とす。勢ひ茲に至れば、主人たるもの細君に促がして、左樣にケチ〳〵するに及ばずと言ふとも尚ほ彼より一層徹かくすべし。下女に向つて、も少し、大ざつぱにせよと言ふとも、彼よりケチ〳〵するに至るべし。この後先の工合は、當初の若手如何に關り、必竟は主人自身の覺悟に存して、つまり根本に目をつくると否との相違より來る、愼しまざるべけんや。

## だだとあまえ

子供がダダをこね、又は、あまえるとき、一概に叱るものあれど、夫は宜しからぬとなり。成人すら年中心地のよきとのみにはあらず、一日に二三度も不愉快になり、氣がムシャクシャするとのなきにあらず。但だ成人は之をつゝしみて外に露はさぬ迄なれど、天眞爛漫たる子供にあつては、其邊の用心はある可らず、また用心せざる所ろが反つて麗はしきほどのものならずや。子供心に何となう不愉快を感じ、又は氣鬱し、物に厭きていやになるとのあるは當然の事なり。其の時だだをこねるは則はち天眞爛漫にしてあながち咎むべきにあらず。夫を辨まへず、無理究屈に叱りこらし、一概に行儀式の躾をのみ專らにすれば、子供のノンビリとした發達をとゞめて、虚飾僞善の風を養成し、一生の上に大なる傷をつくべし。又「あまえ」は一種の食物の如きものにて、子供には欠く可らざるものなり。大人に小兒の心ありて、四五十才となりたる人に愛嬌ある痴態を存するは寧ろ可愛らしきものなるが、夫も必竟は、子供のとき十分に甘えたる結果なり。甘えを増長せしめて、有害なる我儘とならしめては宜しからねど、左りとて、只だ一圖に之を制禁せんとするは反つて悪結果を遺すべし。慈母の温たかき膝下にあまへて成長したる子は、たとへば乳を十分に飲みたるが如し。幼時、あまへて育たざりし子は、コマシヤクレて寧ろ悪らしげのものとな

るべし。何ものにても、過たるは皆な不可なり、過たるの害をもて論ずれば、天下に善きものはあるまじけれど、夫は論外とし、かのダゞとあまえは、元來、子供の爲の滋養物ゆゑ、本來之を滋養物と心得て取扱かひ、ただ其の度に過ぎぬようにのみ制裁すべきもの也。

## 女子手藝の案内

刺繡法　美よしの

女子の手藝はいと多く、又女子の身にとりては一日も欠くべからざるものなることは誰人もよく知り賜ふ所なるべし。古より婦徳、婦容、婦言、婦功の四ツの者は女子の四行とし稱へられ其一をだに欠くも可き女子とは云ひ難しとか聞き侍りぬ、今は昔と移り變り何ごとも改りぬるふし多かめれど、婦功即ち女子の手藝の必用なることとは、いかで古と異ることのあるべき、殊に征淸の役ありてより我版圖西南に延び、はからずも、若干の新しき姉妹を得たり、此新しき姉妹の爲め、我等は適宜なる教育法を求めねばならぬなり、されば言も通はぬ此姉妹等が上に我等と等しき教育法を施すこと能はぬは火を見るよりも猶瞭けきことなれば、此新しき姉妹を導く方法は新に求めざるを得ざるなり、

さて問ふ其法は如何、古を温ね新しきに調じ合すてふにはあらぬも、彼の人々が永の年月爲馴れもし、聞き慣れもしつる、彼の人々の最も好む處よりして緒を開き、漸々我文明の露に霑ひ、開運の風に化し、美事大倭のてぶりに爲なりおほせまほしきことなり、彼の人々の日頃年頃學びてしことは如何、彼の人々の中には書物讀なすべ、文字書く業も拙なからぬ人々もおはすらめ、されど是等は曉の星も啻ならず、廣き國土を普く數ぬるも雙の手を使ふるに過ぎずとか聞く、其余は皆深窓のもとにありて、身じまひの暇終日刺繡にのみ從事すとか云へり、我當路の司、茲に見るありて只管此伎を獎め勵し、彼の人々の嗜好に投じ、之を應用して美術教育の階となし、實業教育の基礎を建てんことを務め居れり、又視線を轉じて僅に一葦水のあなたを窺へば、刺繡の流行いと盛んにして中流以上の家にては戸々繡房を設けて、女子に此伎藝を敎ふ、其道の師と賴むものは孃姐の母なるもあり或

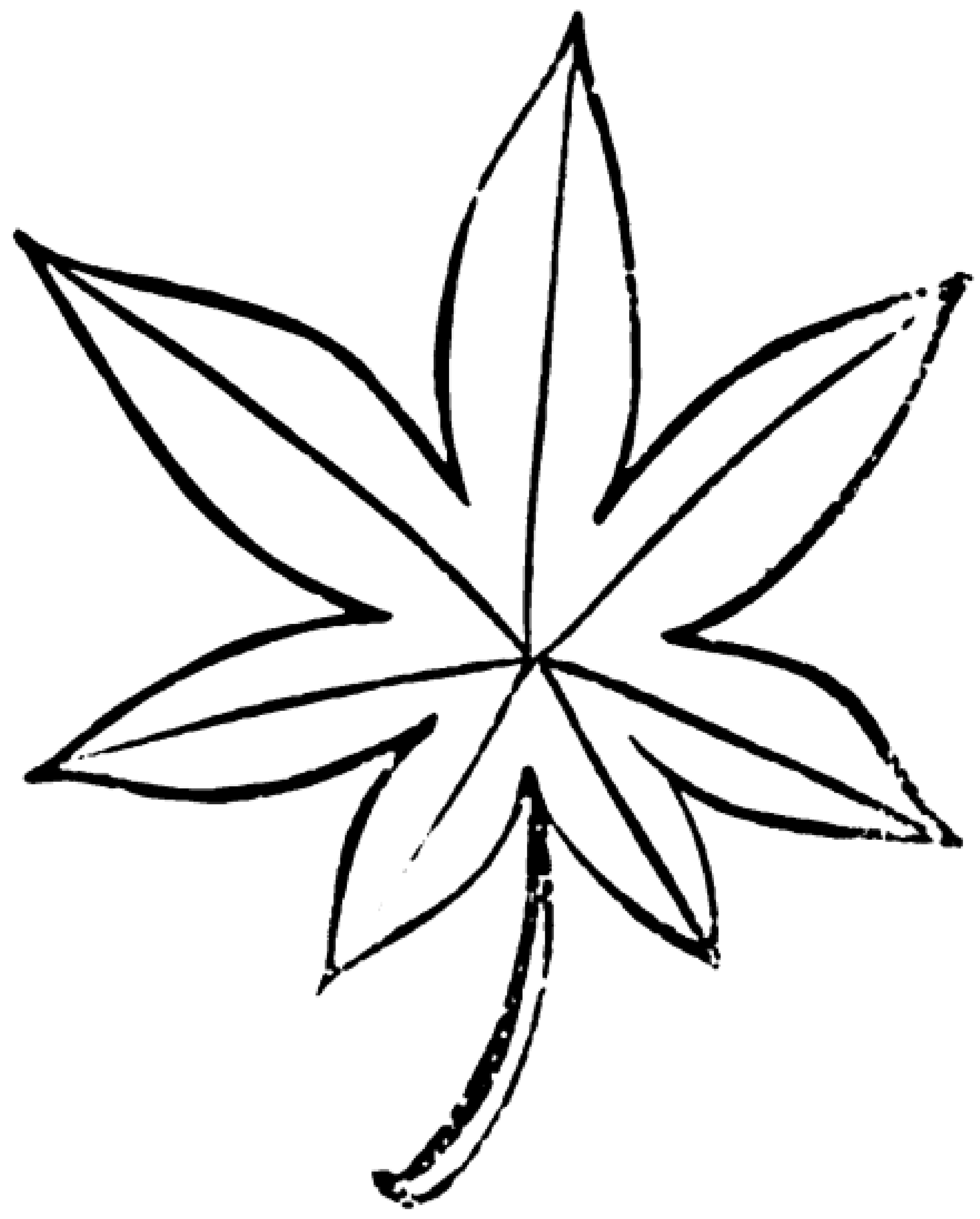
は他より別に師を聘して、教を受けしむることもあり、見られよ彼の國人の日々用ふる品々を、冠帽衣裳はもとより卓飾、掛物、額面、手巾、團扇、扇子、夜の具まで、人物、花鳥、山水の影色、古今の模様異文など彼れ是れと、とり混ぜて五彩まばゆきまでに繡ひ出し、其伎の妙なること、往々我姉妹等を凌ぎ、なか／＼に組し易からぬ好敵手とこそ思はれね、萬に負けず魂もてる我姉妹方はかゝる强敵を目前に置きて、こは小伎なり細事なり云ふに足らずとて、冷に笑ひ徒に見過し、彼の國の女性をして妙伎無比てふ譽を專らにせしめ賜ふか、或は勇み進て、此强敵に抗し賜ふか、いづれをそれと定め難けれど、此時に際し、此必要に臨み、刺繡法の大意を陳ぶるは、我女子實業教育上の一助にして、わらはが本分とも云ふべきかと思ひしまゝに、我師と賴む某の君の訂正を乞ひ、左に其法の大略を書きつらねぬ。

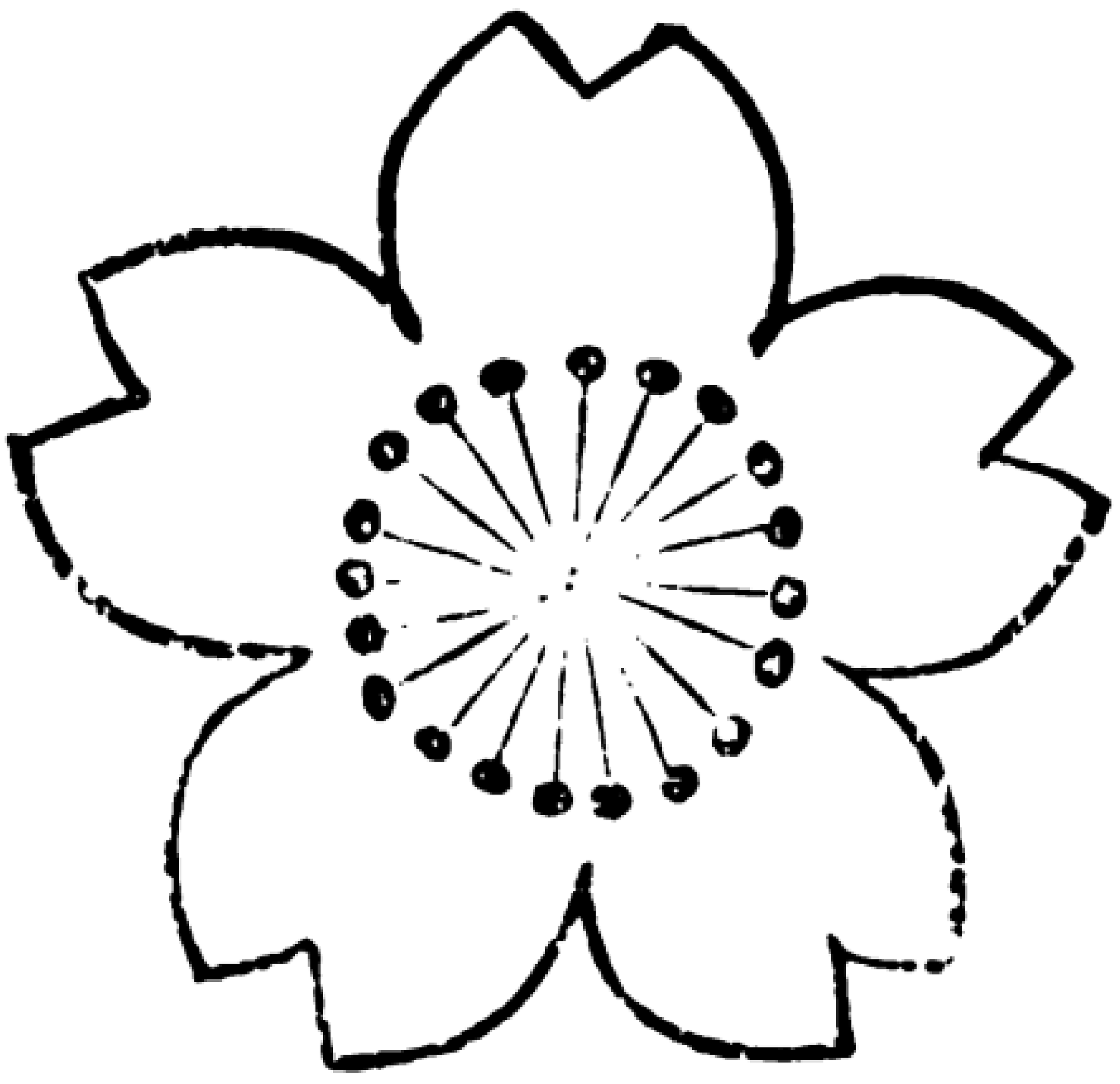
### 刺繡の種類

我國にて用ふる刺繡は染模様或は織出し模様の及び難き所を補ひ行くを目的とせしものなれば染模様或は織出し模様にあしらひ、眠れる如き模様に活氣を添へ、繪畫の上の活筆とも稱ふ可き所に用ひ、さなくして無地無紋の布帛に刺繡するにも其地色にあしらひ、地を活し、兼てぬひ模様のひきたつやう刺繡せねばならぬものなれば、配色の用意周到なるは勿論色の明暗、用糸の光澤をも增し或は減せねばならぬときあり從て其刺繡の種類もいと多し、糸の光澤を保ちしまゝ刺繡する法あり、或は地色に光澤あるときは、ことさらにぬひ模樣の光澤を消して、地色の光澤と衝突せぬやう刺繡することあり、又之に反して地色光澤なきときは用糸の光澤失せぬやう手際よくぬひもてゆくなり、或は地色ひきたゝず、さえず、ほのぐらきこと朧夜の如きものなれば、鮮明なる色の糸を撰びて光明を添へ、他を助け兼て自ら本質を全うし行くを以て、此法の得たる所とす、故に刺繡の種類、從て多きと自然止むを得ざる理なるべし、刺繡を學ぶに當り先づ第一に始むるものは、

### 木綿糸ぬひ

なり、是此法の初歩にしていろはアイウエオの類と知り賜ふべし、其法先づ白色或は黑色の木綿二尺餘りを臺に張り（臺のことは次號に讓る）胡粉或は白粉にて圖の如く最も簡易な





る花或は葉の類を寫し置き其下絵の上を刺繍するなり下絵は刺繍法の精神とも稱すべきものにて、ぬひ方如何に精を盡し巧を極むども、下絵拙きときは更に其甲斐なし、下絵の意匠、配色の當非は、刺繍に就き最も大切なるものなれば別に項を設けて論ふべし、さて此木綿糸ぬひにて用ふる糸は、名の如く木綿糸にして新玉の年の始め娘等が特に愛で用ひ玉ふ手毬を飾る五色の木綿糸にてもこと足りぬべし、されど年



年に世もからくなり行くまゝに、此頃の手毬糸のなかには、刺繍に用ひ難き粗悪の品なきにも限らず、之を求むる際、よく〳〵注意し賜へよや、糸のかけ方は、花なれば一花瓣の縁邊より對方の縁邊にかけ糸毎に並行して渡しゆくなり、又ぬひ始めの點は、大抵花の中心より始むれども、花瓣の上端より始むる人もありとか聞けり、此ぬひ方は最も簡單にして爲し易きが如しと雖も、自然此道の妙手とも稱ふべき特質ある人は之を學びしとき、最よく其天才顯はるものなれば決して輕忽に見過す可きものならずと云ふ、

## 平糸ぬひ

平糸ぬひ一名釜糸ぬひは、よらぬ絹糸にて刺繍する法なり、絹糸の光澤は平糸とより糸とに關せず、具備るものなるが如しと雖も、平糸の光澤は、遠くより糸の及ばざる所なり、故に地質光澤なき絹布類に、花模樣或は動物なぞの簡易なるものをぬひ出すには、最も適當なる刺繍法と云ふべし、平糸はより糸と異りて、ほつれ易く少しにてもほつれるときは、光澤を失ひ見苦しく、又平糸の光澤を失ひたるものにてぬひ出せしものは、もんぱ織の如くけばだちていと鄙し、故に平糸

を取り扱ふには、手際よく速に爲すべし、之を巻くには、俗にいふ、とんぼと稱する十字形に合せたる長さ五寸許の薄く長き二木棍を貫きたる圓き棒に竹を通し机或は他の器の上に棒の一端を支へ、左手にて輕く竹を受け、右手にて棒の一端を廻轉し、竹に糸を巻きたるなり、之に用ふる竹は女竹にして、節なき所を曲尺四五寸に切りたるものなり、此ぬひ方の順序も、前者と異なることなしと雖も、平糸ぬひは糸の吹き飛ぶことを最も忌むものなれば、風なき所に刺繍業をする、飛塵を除けて刺繍すべし。

（つゞく）

## 音物の情誼

鷗村

我家名の他處人より惡く思はれぬやう、すは、事よといふ時には、比隣親戚相救ふの情誼の源、推しはかりて見れば、まとに細君の不斷の注意方の些細なる事にあるが多し。親類の付き合ひは、家持の一苦勞も二苦勞もであるが、其付き合を圓滑に、決して角だてぬやうにするは、相互の人が時々の訪問の仕合もさることながら、主人が何も知らぬ中に、細君が其圓滑を程よくしてゆくものには、盆、正月の贈物は當り前、平常の訪問に煎餅一袋の子供への心づけより、また何物か珍しき御馳走が出來たる時、成程それ等が業々しく贈物などいふ價値はなく、考ふれば馬鹿なもの、先方の笑草になりはせぬかと心配することもあるべけれど、事の實際は決してさるものに非ず、かゝる些少の物の取りあひなどいふが、交際の情誼となり、艱難相救ふの一動力となるものなり。

都會の地にては、人の出入が劇しきより、近所合壁と雖も、引移りの時分に、蕎麥の五ツも配りて、其時主人が挨拶に罷り廻らうが、廻はるまいが、他人は何とも思はず。其後三年たつとも、言葉の一ツも掛けまいが、何の事もなきかなれど、田舍では、近所合壁は、殆ど又の親族の格で、やれといふ場合には、親族よりも近所の人の方が、間に合ふ程のものにて、平常双方より出入りをなし、喜び事にも、悲しみ事にも、互に手傳ひをなすと、互の心の中はさう打とけて親密でなくとも、上邊は實に美事であるなり。されば季節の音物の取り合ひも爲し、到來物の裾分、重詰の取り遣りなどもするなり。さるに又親類はいまさらのこと、近所合壁の人でも、當方より爲すべき折の音物、假令夫が、たゞ僅に手拭一筋で、澤山で

あるべきも、其を忘れば、先方にては、一生涯、其事を忘れずに、根に持ちて恨むなり。されば左樣の事に拔目のなきは、主として細君の役目なり。

故に細君は、此點によく〳〵注意し、平常自分達の事には、節約を加へても、親族、近所合壁への折々の音物に、落度なきやうにすべし。又下部共への心付は、些細の事でも忘れぬやうになすべし。下部どもは、兎角主人の事を蔭口したり、主家の事を吹聽し、自分の惡き事は一切いはで、主人の心付の惡かりし事などは、口を極めていふものなれば、爲に家の名折になるやうの次第ともなれば、注意すべし。また以前は見ず、知らずの旅人が、何かのたよりにて、一夜の宿を假り來するやうなることもあらば、細君たるものは、心を盡して、之を款待すべきなり。さるは些細の厚意ながら、これが爲に我家の仕振りをよく思はせ、又一人より万人に傳はるものぞ。素より其結果を先づ以て考ふやうの利己的精神よりなるは、甚だ賤しむべく、またさる精神の人には、實際左樣の事は出來逢さぬものなり。偏に己が眞心に、隣人を懇にし、遠人を懷くてふ、いと高尙なる精神を以て、人に交際することそ、一家の細君たるものの、甚だ重き責任なれ。これぞ又細君が外交の技倆を表す處なる。然るに今の女學生上りの細君達の中には、兎角かやうの點に拔目勝ちなるも、折々に見受けらるゝが、一際の注意あるべきことなり。



---

●四十年間、呉服物に經驗ある老人語りて曰く、學校に行き本を讀みて學文するほど樂な學文はなし、何事にても一つの事に十分明るくなるには非常の決心を要すと。又曰く、むかしの流行は年限長かりしが、今は二三年も續かず。又、むかしは、縞地の流行を、次に綿類に轉ぜしことなるが、今は夫も出來ず。凡そ、流行ものは、茶屋の女が眞似するに至れば、最早や、終に近づきし證據ぞ。

●多年お茶屋の料理番をせしもの曰く、料理番は日に二度も入浴して淸潔を第一と致し升、女はどうもむさくて料理番となれませぬ、料理番は煙草を飲ませぬ、煙草を飲んでは味をよく見ることが出來ませぬ、加減見に甘いもの計りを食ひまする上に、炭火に計りあたる勢か、顏色自然に白くなります、料理番の男の美くしくなるは夫故でせう。

# 史料散錄

如雲

◎和宮樣御降嫁の後、當分は人々聲をひそめて窺ひ奉れり。御胤は一天万乘の威嚴にまします、たとひ降嫁して徳川氏の御臺所とならせ玉ふとも、自づから尋常の御縁組とは異なる、御夫婦の御中合も如何あらせ玉ふべきなど、近侍は申すに及ばず、殿中の人々眉をひそめて案じたりけるとなん。然るに、或る時、天璋院殿、將軍、和宮樣のお三方、芝のお濱御殿に御遊の折節、如何の都合にてありけん、お庭の敷石の上に御草履を並べたるとき、天璋院と和宮との御料を石の上に置き、將軍のを下に置きたりける。扨て、お三方、庭にお下りあらんとして、天璋院先づ起たせられ、式の如く穿ちて進ませられしが、和宮さま、將軍と並びて椽側に臨ませられ、ふと此ありさまを御覽ぜらるるや否や、御洗足のまゝ早速に飛下り、將軍の御草履を石の上に載せ、御自分のを下に御し、身を屈めて、將軍の降り玉ふを待ち玉ひけり。人々此の御有樣を拜して、感涙にむせび、之よりして、殿中忽ち鎮靜したりけるとぞ。

◎御一新の時、浮浪の徒、和宮樣を奉戴せんとすなど切りに浮評あり。西京に於かせられても、御迎へ取りの御言葉もありしよしなれど、宮は固より貞靜にして動かせ玉はず。一旦徳川氏に嫁したる上は、徳川氏こそ吾が家なれ、此と共に興廢すべしとこそ仰せらるべけれとありて、少しも聞こし召し入れ玉はず。後ち御永逝の節も、われは決して皇室の御陵墓に葬ぶる可らず、必らず徳川氏代々の山墓にこそ埋むべきものなれと、固く遺言あらせ玉へりとぞ。

◎慶喜公、大阪より御還府のころ、天璋院の御事に付き、多少、御掛念の言葉あらせられしとかにて、院は特の外に殘念に思し召し、吾は是れ徳川氏の寡婦なり、何の罪ありて里方に還さんとはせらるるぞ、徳川氏倒るれば則はち之と共に倒るるこそ婦女子の道なるべきにと仰せられ、もし薩摩に還さんなど申し出られなば、即座に自害すとの御決心にて晝夜、匕首をはなし玉はず。六人の侍女は、皆な院と同年にて、もと薩

墜より附き添ひ参りしものの由なるが、何れも一躰の決心を固め、在様の時は、寸刻も後れず、御供いたすべしとて、此も皆次將役、匕首を離さゞりけり。

◎和宮と天璋院との御間柄、初めは侍女の彼此と申すによりて滑らかならぬ節もありし由なれど、後には水魚も啻ならぬ御睦みとなり、大小万事、互みに御相談ありて、二つなき御交はりと見えける。徳川氏政権奉還の大革命にあたりて、表に立てる三英傑の勢力は世の普く知る所なれど、内に賢明なる御二方の内助ありて、初めて斯の成就なし故由を知る人、稀れなり。古より大奥の事は至難中の難事とせり、かの改革の時にあたり、一方は大閤に、一方は宮座に御縁ありて両も道として徳川氏の為に操を守らるるの際、もしや大奥深き處に御異議のあらんには、大變と喚び立つて解決の手段も得て行はれざるべけんに、此の實際の則ち世人の知る如く妙に結果を致しによりて、少しく當時の思想を推究すべし。御二方の御内助の功は、維新の大改革を平和に成就せしめたる偉勲のうちの最大なるものにてふるべし。

◎封建とは、漢學者が支那の文字を當てはめたる迄にて、其の成立ちを考ふれば、郡縣に變へたりとも僞に疑るべきにもあらず。郡縣、封建は、畢竟、名の上の爭のみとなるべし。所謂る封建の最初の成り立ちを考ふるに、秩父の莊司とか、熊谷の二郎とか云ふ如く、其地方々々に豪族ありしが、次第に近邊の地主に金を貸し、地所を抵當にとりなどしたるを初めにして、後には、地主が小作となり、小作が旦那に出入するやうになり、次第に兼併して、次第に其の一と集りが大きくなるに随ひ、今とは違ふ百人二百人の徒黨のある大賊を防ぐにも人夫が入用となり、境を接する他の豪族の侵食を防ぐにも人夫が入用となり、即ち、旦那の家に寄宿するものや、小作人中の壯丁などを撰びて、兵となすに至る。家に寄宿したるものが、家の子なり、小作人中の壯丁が郎黨なり。此の家の子、郎黨を率ひて、まさかの時は負けぬやうに武術の稽古でもさすれば、隣りの豪族も亦た同樣にし、其の競爭よりして次第に兵を磨くやうになる也。此の地方々々の豪族が、其地方を治め居る故、何の守などと定められし役人も身づから其地に出でゆくに及ばず、行くとも只だ閑遊するまでの事ゆゑ、のちには誰も行かぬやうになり、皆な、西京に居なが

ら、隱岐の守とか、佐渡の守とか稱へ居る也。但し、豪族の力量は壯んなれども、元來、土百姓の上りゆゑ、公家には輕蔑せられ、御殿に行つても、椽側に上るとも出來ず、皆な土下座なり。椽側に上ると云ふは大榮譽の事にて即ち昇殿と稱へ、源の義朝にして一生の望は、昇殿にありと請ひしほどのと也。左れば、後には、各地方の豪傑が、都に金を送りて官名を買ひ、衛門とか、右衛門、左衛門とか、兵衛とか云ふ役の名義を請ひ受け、名譽にしたるが、後には其の求め手多くなり、單に衛門、兵衛にては、まぎらはしくなり、其の字を上につけて、何々衛門とか、何々兵衛とか稱するに至りしなり。

# 問答

## 本年の時勢如何

とも申すべき問の心を寄せらるる仁あり、其の旨たる今年の氣運は大凡そ如何にてあるべき、盛運ならんか、衰運ならんかとの掛念なるべし。之は、至つて大いなる質問にて、而も社會の全體に關係するとゆゑ、固より一紙一筆の得て能く悉くすべき所にあらず。然しながら事のあらましは得て言ひがたきにもあらずとて、左に其の大概を

## 答

へんに。去年秋、現內閣の組織が甚だ困難なりしによりて其の一斑を推諒すべきが如く、政治上に於ては既に大危機の切迫し來る前徵を顯したり。經濟社會にても、貧乏人の俄富權數億万圓の僥倖もうけにて、所謂る空膨脹の結果は、反つて難澁を釀すと世間の人情なり。評論社會にては、空論いよ〳〵隆んになりゆき、あちらにも、こちらにも、大人物を所望する聲は連りに聞こえ乍ら、扨て何人か自から血汗を流し竊かに辛苦して之に任ぜんとするにもあらず。宗教界に於ても、世に普ねく知る如き喧嘩は衰微の外はあらず。國家將來の新元氣何處にありやと、つく〴〵と穿鑿するに、四方皆な蕊蘂の衰頹にて更に氣力ある有望の勢力を認めず、申さば八面皆な隱居せんとして相續人の未だ起らざるが如し、國家の大危機にはあらずや、左れば、本年一躰の氣運は依然とし

て、下り坂に向ひつつあるとは固より言ふを待たず、此の先何等の有望なる目とめのありて云ふにはあらず、人心の萎微大に振作すべき目途も立たざる也。況してや、支那朝鮮の方には反つて陸々たる進運の近づきつつあるに、翻つては比較的、我國に之と云ふ好運の來り臨まんとする目當もなきに於てをや。恐らく人心は何處迄にも喪ふべし、今の一時の元氣は附元氣にて久しく頼むべきものにはあらざる也、故に、本年は、危きに近づくの前途と覺悟して、人々固く用心し、浮たる心を捨て過分非常の新事業を起さず、從前にして相應なる仕事に盡力し、在來の營業は結を克くするの氣力にて續け、只管ら實着、常[illegible]を儉約するの外あるべからざる也。某隱士、本年の運氣を占して、水天需の初爻を得たり、此卦の道たる、險、前に在り、ゆゑに剛健にして陷らざるにあり即ち、之を須ち、之を需めて、預め戒しめ、前途の險を防がんとするを義とす。而して、初爻の辭に、郊に需つ、恒を用ゐるに利しとあり、其の傳に曰く、郊に需つとは、難を犯して行かざる也、恒ゐ用ゐるに利しとは、常を失はざるを言ふと。茲に郊と記したるは、洪水ある所より若干を隔たりたる偏鄙の地を言ふ。易の占によれば、來年は、少しく言ありとて何か事あるの前兆に近づき、來々年は寇の至るを致すとて、災、外にあり、我より寇を致すと注し、既に大事を引起すの兆あり。之を洪水ある地の遠近に喩へ、來年は川の砂地の所、來々年を泥地の所と言ふに對して、本年を其の手前の郊地にありとは言ふ也。即ち、易占の主旨にも、本年は、來年、來々年と追々危機に近づくの前方なれば、深く用心し、恒の一字を大切にして、万事、常を守るにありと教ふ。易占も亦た不思議に吾人の言ふ所に合すと申さん哉。何れにせよ、本年は、人々用心して、恒の産を守り、恒の心を堅くし、何事も手堅くして、浮きたる心を出さず、敬愼して事に當り、然らざれば遂に到來すべき危機を預め防ぐことを肝要とすべき也。

冬月　　景樹

てる月のかげのちりくる心地して
夜ゆく袖にたまる雪かな

# 文藝の道

山下石翁

惣じて藝術の奥は皆な道なり。一と度び此の道に達して其の妙味を掬すれば、此を推して彼に及ぼし、以て惣ての藝術の妙所を察するヿを得ん。蓋し、藝術を指頭、躰肢の技と言ひ去りて、只管ら器械的の作用にのみ着目する比ほひは、未だ能く其の堂に上らざるもの也。經營慘憺たる苦辛の末、刻苦勉強して其の妙所を自得するに及べば、些々たる一小藝術の如く人には見ゆべくとも、亦これ吾が全身全躰の獻牲を所望すべき大事件にてあるヿを發見すべし。即ち、僅に、指の頭、足の末にて催すべく見ゆる技とは言ひ乍ら、實は、吾が本躰の全部を投じて初めて成就すべき至重至難の藝術なれば、必竟は吾が本躰の顯現するに外ならず。左れば元來、吾が本躰を修練々磨して後、初めて成功すべきものたる由縁、明白に知諒せらるべし。



此故に、藝術を修めて先づ其の形式の習ひに工夫するは、學の初歩なり。形式の學は、數ヶ月又は數ヶ年の間、駸々として、進み、目覺ましき進歩を奏すべし。然し乍ら、此の一と通りの進歩を了へたる後は、ハタと中止し、たとへば膠にて吾が腕を着けたらん如く、最早や少しの自由もなく、同じ所を、お百度參りするに似て、毫も前途に進まざるの心地すべし。是れ學の第二期の初まる發端なり。

是よりして、吾が手、吾が躰の修練の外に更に修めざる可らざるもののあるに氣付き、辛苦苦辛して初めて吾が心に多少の自得を得、師匠の言語によりては聞かざる一道の工夫を吾が經驗にあつて直覺し、初めて、心の修練と云ふその藝術にも大切なるヿに、注意するようになるべし。

一度び此の門に達すれば、是よりは、人知れぬ工夫を獨り自から試ろみて、血の汗を滴らせ、血の動氣を踊らせ、幾度か失望せんとし、又幾度びか雀躍するほどに自から悦び、不言不語の間に言語に役する苦辛を重ねて、やうやく、先哲の不立文字とも云ふべき秘訣に悟入し、其の悟りを以て新に先哲の言行、示教に聽けば、若々として吾が胸に應ずるものあ

り。心中の爽快、たとへんものなく、勉學の精神、火の如く燃え、所謂る藝術の道なるものを愛好するの心念大に湧き起るべし。

既に此の堂に上れば、之よりは、堂上秘密の修業にして、最早や、之と云ふ一人の師匠もなき代りには、あらゆるもの、皆な吾が師匠となり、目に見るもの、耳に聞くもの、總べて吾が靈覺を助け、其の業の進步別段にして、尋常の修業者が企て及ばざる神采を得んとす。即ち是れ妙手と名人となるの道行にして、もし此の道行を怠らずんば、遂に大家となるに至るべし。

以上述べたる大畧の順序は、書畫、鳴物、挿花、裁縫、細工など、何れに於ての技はりあるとなし。而して若し其の一藝に達したるの心を以て、他を推するときは、他の藝の道なるものも、必ず「コ、なんめれ」と云ふ肝處を悟るとの出來がたきにはあらず。

凡そ、天の賞罰は、何處に向つても均しく下し置かるるものゆゑ、若し何等の藝術にても、貫きて其の奥に達したるものには、皆な同樣の樂しみ、同樣の褒美を與へらるるとなるに學ぶ人の思想、兎角、軟弱にして、能く徹底するもの多からず、何れも、一と通りの外面を揣摩して、其の薄皮を撫ではし、肉を刺し、骨を刺し、心髓を刺し、更に其精神を洞察せんとするものなどは、甚だ稀なり。これ、何等の藝術にも追々、名人妙手と云ふものの減じ行く所以なり。

故に、何等の藝術たるに係らず、世に若し名人妙手と云ふものあらば、親しく就き、敬つて聞き、仔細に其の長所を窺つて、其獨得の妙所を考へ、之を吾身に引き當てて、工夫の材料となすべし。もし人、此の消息を辨じて、此の般の覺悟を有するに及べば、あらゆる現象、汝を利益して其の智見熟くべく進步し、三日刮目ずして既に落人にあらぬかと歎美せらるるに至らん也。



○雪中早梅　　　磯山まつ子

花やいづれ冬ながら咲く梅が枝を埋めて匂ふ今朝のしら雪

○氷初結　　　同

まさり行寒さは今朝ぞしられける庭のうち水こほり初むれば

○菓子みまかりしとききける。菓子の住めりし處は雪深き深山路の里なり。　　　同

ましてのやま路のふるみち踏みこえて獨り行くらん君ぞ悲しき

# 兒藍

## 雪崩

さち子譯

佛蘭西と露西亜との、戰爭の眞最中、頃は丁度今からザーット百年ばかり前、只さへ寒さ肌をつんざくと云ふ、十二月の一朝、佛兵は敵國の都府モスコーへ進行の途路、彼のアルプスの高山を、越えかけました。雪は膝をうづめ、寒風はピユー〳〵と骨までしみ渡り、さなくとも、長旅の疲れ兵粮の不足で、氣力なき兵士等、今は弱り果て、堪へ兼ねて見えました。然るに此實に憐むべき一行の中、みんなの苦みかへつた顔色に引替へ、薔薇色の頬に、にこやかな顔、砂漠の花とでも云ふ樣な、一少年がありました。名はピーヤ、年は十歲、役は太鼓打、少さき肩に太鼓をぶらさげ、雪を蹴立てゝ飛び廻りさも面白さうに、愉快げに、吹き下ろす、雪を小さき手をもて、拂ひのけ、折々勇ましき、太鼓の音で、山々の反響を呼び起し、疲れ果てたる兵士等を勵ましました。

エライゾ、ピヤ、其太鼓の音を聞いてはモスコーも近くなるわ。

と鼠色の外套に包まれた、脊高き一人が、云ひました。ピヤは手を擧げて、敬禮をしましたが、これこそ、彼の有名なる勇將マクドナルド「一人で全軍の價がある」と、兵士等に愛し敬はれた人でした。此時も、この大將の聲を聞くや、一人の兵士は思はず大將万歲を、呼びました。一人から一人に傳はり、遂に全軍より万歲、万歲の聲が、湧きかへり、山々は之に答へて、暫しは鳴りも止みませんでしたが、漸く遠くなり、遂に消失せて、前にも勝りて、靜かになりしと思ふ途端、忽、山の頂に、雷の落ちたるが如き、實にすさまじく、恐ろしき音がしました。兵士等が一齊に目をあげて、見ましたら、それも道理、雷にも勝りて恐るべき、彼の雪崩が、破竹の勢をもて、彼等に向つて、進みつゝありました。

雪崩だ！つ伏せ。

その大將の下知に、從ふ間もあらせず、瞬く隙に、雪崩は彼等の上に、彼等を越えて、一聲山が崩れしかと、思はる程の、地響を以て、下なる谷に、落ちました。再び兵士等が起

き上りまして時には、憐れや、彼等の、友どちの多くは、生き乍らにして、雪崩の中に、葬られました。然し彼等が、第一に、氣付いたのは、彼の太鼓打のピヤでした。

太鼓打はどうした。

とはみんなが、異口同音に、尋ねた、問ひでした。

ア、實に、ピヤは、どこですか、呼べど、叫べど、答るものは、反響のみ、ピヤも、雪崩の、餌になった一人でした。

全軍の、悲しみは、實に、非常でした。あのにこやかな、可愛い顔を、再び見ることが、出來ないことを、思ふては、流石に、强き、兵士等も涙を抑ふることが、出來ませんでした。

皆お互に、感傷の涙を、呑んで、ひそみ返て、居りし其時谷の底より間違ひもなき、太鼓の音が、聞えました。

兵士等は、呼吸を殺して、なほも聞きますと、ピヤが兼て愛した、進軍の譜を打て居たので、今は一時の猶豫も、成りません。

ピヤは生きて居る、死なしてならぬ。

と一齊に、谷間に向つて、馳けつけました。

ピヤは私が、助けましやう。

と大將は、外套を脱ぎつゝ、靜かに申しました。

イヽエ大將、それはいけません。貴き御からだを以て、もしもの事の、あつた時は、それは大變です。私共が、皆な死んだつて、おつつきません。

此時既に、大將は身輕になつて。傍の兵士に繩をもつて來る事を云付けました。

ナニ、ソンナ事があるものか。私の下にある士卒は私の子だ。親として、これしきの事が、なんだ。サアその繩で、私をしばつて、おろして呉れ。

と自ら繩をもて、腰のまはりを縛り、身を空間に投げました。

大將は、ぶら〳〵と、だん〳〵遠く、だん〳〵小く、遂に、谷間の暗の中に、見えなくなつてしまひました。大將は漸く谷底に達して、四方を見ますれど、人らしきものも見えず、此時は、もう太鼓の音も、とうに消えて、ピヤの在所を、知らせるものとては、何もありませんでした。

ピヤ、ピヤ、どこだ、

と聲を限りに叫びました。

[illegible]こゝです、大將、此處。
と云ふ聲もまことに微でした。
　志つかりしろ、助に來た、今行くから。
と聲を便りに、大將は、雪の中を、たどり〱、遂にピヤの所在を見付けました。
　サア私の頸へシッカリと、ソウダ、イヽカ、つかまれないか？
　困つたなア。
　ピヤの手は固く凍ッて、どうも自由になりません、兎角する内には大將も凍えて、仕舞ひましよう。大將は手早く、自分の締めて居た帶を取つて、ピヤを、わがからだに、結び付、引けとの合圖を與へました。
　再び大將は空間に、此度は一人ならず、ピヤを抱へて、だんだん上に、増々近く、遂に全軍の天地にどよろく歎聲の中に無事に、上まで引き上られました。兵士等のよろこびは、實に言ひ盡されぬ程でした。手から手にと、ピヤは、下へも、置かれず、手厚き介抱を、受けました。大將は、ピヤの手を、こすりながら、
　不思議な縁で、お前とは、火の中、雪の中で、生死を、一處にしたが、これから後、生涯中、どうか離れたくはないものだ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

　戰爭は終り再び太平の世となりしより數年後、フランスの南の方に、閑靜な、田舍家が、ありましたが、その庭園の中を毎日の樣に、一人の白髮で腰のまがつた老人が、壯んな靑年の肩に、すがつて、運動いたして居つた相ですが、此二人こそ、先の大將マクドナルト、彼太鼓打ピヤであつたと申します。

## 雜録

### 『天賜』の畫に題す

長汀

　茅屋の裡、夫妻相棲む。不幸彼等の間未だ一子の天授を獲ず。彼等素より傳ふべきの產業を有するに非ず、果たまた耳目を喜ばしむべきの快樂あるにも非ず。然りと雖も猶彼等は一子若くば數子を獲て屋裡に嘻々緝睦の聲を溢れしめんとを希へ

り。これ蓋し彼等が現世に於ける無上の樂しみたるべきなり。

これ實に希望の繋がる處、平和の泉む處、されば、彼等の信念は、常に天に仰いで、一子を望めりしに、時滿て、天賜は降れり。見よ蒼天の碧雲、たちまち開け、一道の靈光映射して、この茅屋を照す。靈光中、温雅高潔なる一天使、一童天使に擁持せられて、翼を張りて翺翔す。見るべし其懷裡に、可憐秀麗の一嬰兒あり。天使はこの嬰兒を、この茅屋裡の夫妻に天授するあらんとして、今白雲の靈鄕より天降りつゝあるあり。

彼夫妻此靈異に感じて、一子眉目秀英なるもの、某の日に於て彼茅屋裡に呱々の聲、勇ましく揚げたり。彼等は正に天賜を獲たり。平和、喜樂、希望の源泉を與ふるの天授を受けたり。是が爲に彼等は熱誠に摑んで、天に向ひて、感謝の祈禱を捧げたるなり。

凡そ夫妻の間、子女あるは、これ天來の恩賜ある所以なり。この眞理よく解知せられなば、誰か子女の育成に貢提薫戒せざらんや。子女の一稱、吾人は之を『天賜』と呼ばん。畫家が、此大作ある、抑も亦此意義に形軆を與へて、靈活の氣、一幅裡に氤氳たらしむる所以なるを知る。

此『天賜』の原畫は、獨乙國畫伯ブロックホルストの千八下八十五年に畫ける所のものにして、是が寫眞は、博士新渡戸稻造氏の寄贈に係るものなり。

## 書を某地の一團躰に寄す

遙かに諸兄に白す、諸兄年毎相會して友愛の情を懇にし、舊盟を重ねて一段の新意を添へらる。恐生親しく席末に列するとを得ざるを恨み、玆に敬賀の辭を寄せて諸兄の清福を祈り併せて微衷を陳ず。」恐生惟ふに、自治は活者の精髓なりと。夫れ人、自から治めずんば正しきと能はず、國自から治めざれば、大いなると能はず、柔りに支柱を他に依賴するは生物の能事にあらざる也、此を以て人反省自修の道に悟入せざるよりは、未だ曾て徹底せず、國獨立自治の氣力に奮發せざるよりは、未だ曾て隆起せず。一家一町村の事も亦此則に違ふと能はざるを見る也。」然るに方今の士自から測らず、大道を破つて敢て私せんとす、其倒れざるは稀れなり。凡そ他に傳道せん

とするものは先づ之を己に傳へざる可らず、他を敎へんとするものは先づ自から學ばざる可らず。孜々として躬行し、試みて實踐し、吾が活ける經驗を擧げて他に供し初めて其用を爲す、亦これ自治の道なり。」一家の事小に似て實は大、天下の事大の如くして實は小なり、もし卑近に實例を察して之を遠きに活斷せば、宇内の形勢歴々として眼中にあり、邦家の事豈に治めがたしとせんや。然るに當今の士、實踐の工夫に淺く、徒らに疎大を望んで立脚の素養に乏し、此れ大を希ふが如くして實は小なるのみ。自治の道決して此に存せざるとを知る」。竊かに今の政士が爲す所を觀るに、着眼淺低にして、多くは歪視す、要緊に中らざるもの比々として是れ也。誰か方今の政士に六尺の孤を託せんとするものあらん。況してや彼の空論囂々たるの徒に於てをや」。今の所謂ゆる政治は形式の議論に過ぎず、其成敗は實地に何の影響かあらんや。恐生惟ふに内閣の交迭此よりいよ〳〵頻繁にして四民之を顧みざるに至らん、此れ當然の數なるのみ。但だ靈敏透徹の士ありて意外の時、意外の地に機輪を轉じ、談笑平易の境に大勢を決して、潛運默移の妙を果さん、別に質實誠直の良士、到る處に割據し、優に鎭臺の實を立てて、良民をして堵に安んぜしめん、是れ政治の實相なり。然るに徒らに議院政治の形骸を學び、地方自治の空文に拘泥して而も其の精神を知らず、歎ぜざるべけんや。」玆に諸兄明識あり、深く先づ身を修めて而して之を他に及ぼし、近く先づ一地方を嚴かにして而して全躰を堅くせんとす。正に是れ當今の時弊に中りて而も現時に緊要なるの處置とす。恐生の驥尾に附かんとする所以のもの實に此が爲め也」。抑も古來大人は恒に達觀す、而して達觀は非常の識見にあらずして眞は平凡の觀なり、もし十年以上の打算を以て遠大の經綸を施さば、處策の遂に尋常一樣の手段と相似るに至らざるもの稀なり。たゞ小才の士、徒らに奇策を求め、數年にして自から顚倒す、何ぞ志の小にして策の陋なるや。」兄等の抱負は斷じて如此く拘々たるものにあらざるなり。玆に二箇の旗あり、右に題して友愛の情と記し、左に署して正義の膽と註す、兄等左右二流の國旗を揮つて邦家百歳の大事に進まんとす。玆に明治三十年を迎へて第二維新の機正に熟し、國家大に動きて一大事變の足下に起らんとするの機に際し、謹んで諸兄の堅確なる決着を祈願

すと云ふ。

## りんきといさめ

登代女

妻として、夫の品行よからぬ事あるをば、彼是いふとの心はいさめなれど、其跡嫉妬に似て、夫にも悪感情を起させ、人よりも女徳を損ふものとして、彼是非難せらるゝが、世間にはまゝあるためしなり。是に如何なる事の行違ひより、かくは誤らるゝにかといふに、いさめといふは、先方の為のみ思ひていふべき事なるを、之に我身の腹立しさ、我心の苦しさなんどを、取交ぜていふより、さては嫉妬と聞違るゝ事とはなるなり。昔よりいふ女の道にも、嫉妬を七去の一には挙げけるもの乍ら、絶えて諫めを呈せざれとはいはず。只折を見て色を和らげ、氣を下し一筋に夫の身を氣遣ひていふ、赤心よりの詞ならむには、ゆめゝゝ咎めらるゝふしあるべくもあらず。さるを嫉妬と見られむとの氣遣はしさに、夫の過失を見ながら、空しく過さむは、ひとり其身を潔くせんとする不深切ともいはゝいふ可らむ。されば夫の身を思ひて、いふべき言の葉にも心得はあり、いはぬにも妻たる道に欠けたる所ありと思へば、扨も世はむつかしきものなる哉、いなゝゝむつかしといへばむつかしけれど少しく其心を得たらむには、さして難問題ともいふ可きにもあらじ。假令ば夫の怪しげなる夜遊びなどして、更けゆく鐘の音に指を折り屈へて、閨へも入らず待つ人ありとも思はで、いと遅く歸りたらむ時など、出迎ふるや否や何處如何なる處にて夜をや更し玉へる。待つ身の心をも少しは推し玉へかしなんど、まづ其身の怨を冒頭に置きて、扨くどゝゝしくいひ出なむには、我身の行ひを良しとは思はぬ夫にても、成程夫は御尤以後心得申べしとは、いはるべき譯のものにはあらず。中には今宵も、歸り玉はむ程は覺束なかるべしとて、初更の頃にれはや門をも鎖しつ。やがて夫の歸りたらむ時、こなたは空寢入して出も迎へず、煙草の火は消え、鐵瓶の湯は冷えて、一碗の茶さへ啜るによしなき思させつ。口のみあなたのお爲てふ名にて、何事を説き出たりとて、其は素より聽かるべくもあらざるなり。それ故かゝる場合には、何處までも

かの風吹けばおきつ白波立田山てふ歌の心を忘れず、如何なる人にても痛み入りなむやうにもてなし置きつ。日を經てよき折を見出し、一言二言ほのめかしなむには、爭で少しにても夫の心を動かし得ぬ事あるべき。殊に人のいへるを聞くに、如何に暴慢なる夫にても、たはれたる方に行きて、夜深く家に歸るは、餘り快きものにはあらず。故に門を入る時は、多少良心に咎めらるゝものから、おくれては妻の爲に先んぜられ、怨みをきかさるゝの恐れあれば、寧ろこなたより先んじて、其氣を呑むには如かずといふ政略より、遲く家に歸る時は、何角につけて腹立しき形を裝ひ妻をして色を失はしめ、其虚に乘じて、やす〳〵と眠るなりと。きくもうたてき事ながら、よく〳〵思ひ見れば、こはなか〳〵に婦人なるものゝ、參考とすべき事共なり。かゝる場合の夫の心は、自ら其良心に責められて、心の裡に鬪を起し、我と我心の苦しさ、きまり惡さに、其を裝はむとて、こと〳〵しく小言などいひ虚勢を張りつるものなるに、こなたは夫れに心付かで、其小言をば眞面目に受け、おのがそゞろなる行ひしながら、猶且我を怒り玉ふは、何處迄酷き御心にかなへど、こらへこらへし胸の思ひの、一時に昂まりて、いふまじき事をもいひ、果は犬も喰ふべすとかいふなる夫婦喧嘩を仕出てゝ、夫にははしたなき婦人と賤まれ、召遣へるものにまで、りんき深き奥樣と思はるゝは、なんぼう口惜き事なるべき。されば、よく〳〵こゝらの事を辨へて、夫の過ちに乘ぜぬやう、又こなたの心を誤られぬやう、時と場合を慮りて、徐に夫の良心を、ひき出さむと力めなば、いさめとりんきを誤まらるゝやうの事なかるべく、又其いさめの効もありなむかし。

# お世辭のいひ方

とよ子

お世辭といふもの、素〳〵いふまじき事なるものながら、兎角世間は、曲れるを曲れりといひては、通りがたき事あるものぞかし。されば強ちに追從輕薄となるべきにあらぬお世辭は、一ッ二ッいひたりとて、さして咎むべき事にはあらざらむ。されど餘りにそら〳〵しきお世辭は、其人の心の底も見え透きて、却て無禮となる事あり。或お世辭多き人の、色黑き令孃に對して、どうもあなたのお色艶は、格別で入らっしや

い升ね。生白いのを好くのは、上方者で——江戸ッ児は、浅黒いに限り升よと誉めしを、如何にも聞苦しく覚えし事あり。如何に浅黒きを好くは、江戸児の習ひなればとて、令嬢の浅黒きを誉ぶべしや。かゝる人はお世辞家に似て、却てお世辞の下手なる人なり。お世辞のお世辞と聞ゆるはお世辞の効を失へるものなり。お世辞は成るべく真實と矛盾せぬがよし。巧なるお世辞は、人の自惚せりと覚しき點を賞むるに在り。自ら心に得たりとする事は、人の賞むると、悪くは真實とせぬものから、ほめられたるものゝ鼻のあたり、自ら蠢くやうにも覚ゆるものなり。さはいへかゝるお世辞は、いと罪深きお世辞なり。只々お世辞は、真實より出たるが善し。真實より出たるお世辞ならむには、別段其いひ方に心を用ゆる迄もなく、人の心に満足を與ふるとは疑なし。

## 海士をとめ　　花影

いりえのくちに　さしいでし、
　磯山でらの　かねのこゑ、
水をわたりて　ひゞきつゝ、
おきに入る日を　おくりけり。
すあしをなみの　あらふさへ、
　こゝろにとめで　つく〴〵と、
沖のかたのみ　ながめつゝ、
　ひとりたゝずむ　小女あり。
よはひは十か　十一か、
　いまだうき世の　わづらひに、
こゝろをみだす　としならず、
　なにをかくまで　おもふらむ。
小女にひとりの　兄ありき、
　過にしあきの　夕ぐれに、
浦のあまらと　もろともに、
　沖のかたへと　漕ぎいでぬ。
その夜もあけて　またくれて、
　今日か〳〵と　まつひまに、

いつしか年も　かはりしが、
兄の小舟は　かへり來ず。

沖よりかへる　舟ごとに、
兄はこぬかと　たづぬれば、
老いたるあまは　なみだぐみ、
わかきは愚痴よと　笑ひけり。

隣のおきなは　きかせけり、
おん身の兄は　大なみに、
ふねもろともに　呑れけむ、
いかにまつとも　かひなしと。

むかひのおうなは　をしへけり、
おん身の兄は　いはかどに、
舟くだかれて　死につらむ、
いかに待つとも　かひなしと。

されどをとめは　夕ごとに、
なみうちぎはに　たゝずみて、
沖のかたのみ　ながめつゝ、
兄のかへりを　まちをりぬ。

なみだのごとき　村雨の、
たえ間だになき　夕まぐれ、
をとめがいへに　鐘のこゑ、
うちしめりてぞ　きこえける。

村のはかばに　あたらしく、
ちいさき墓を　ひとつまし、
夕ぐれごとに　たゝずみし、
小きすがた　なかりけり。

里のこどもは　かたるなり、
小女のあにには　かへりきて、
いともたのしき　とつぐにへ、
いもとをつれて　ゆきたりと。

## ふるな雪

高瀬花陵

梓弓木の芽もはるの
　來にけりと心のどかに
喜びしかひもあらなく
　かきくらし春雪ぞふる
ふるな雪春のめぐみを
　家毎につたへて鳴ける
鶯のこゑやこほらむ
　うぐひすの聲や氷らむ
ふるな雪春まちかれて
　あさみどり糸よりかけし
青柳のうけくやあらむ
　青柳のつらくやあらむ
ふるな雪乙女さびすと
　野にいでゝ若菜つむらむ
乙女子の纎手寒からむ
　乙女子のまて寒からむ
ふるな雪すみれたんほゝ
　菜の花のにほへる野邊を
蝶のごと遊びゆかんと
　君はしも春をこそまて

# 随感

## ○新しきものは何事ぞ

歳々新しき年を迎へて而も眞に新しきものは何事ぞ。つくづくと惟んみれば、去今、宛がら二つの影の如し、將來は抑そも雲烟にはあらずや。人生齡を重ぬる六七十、他意なく、うれしと感ずるとの數々、果た幾何かありし。青年、一學校を卒業して喝采のたゞ中に證書を握りたる時、心中不可思議の春にあひそめて、かの初戀と云ふものに驚かされし時、愛子呱々として一聲、曉天のかすみを破りたる時などは、眞に樂しきものの中なるべし。其他、公事、私事、大なる、小き、玆に爲すべきあると、彼に吊すべきあると、相雜らざるは少なし。吉凶は所詮、物の兩端の如し。事を結ばんとしては自から其の二つを合はせざる可らざるなるべし。人よ、汝は虹を追ふか、夕やけに醉はんとする乎、朝の露を包まんとする乎。念ふべし、人生の眞の約束は、斯如き流轉少時の花のしがら

みには存ずまじきことを。

## ○日輪の影、人情の色

日輪の影万古かはりなし、人情の色千古新たならんや。時に人、随意の評論を下して古へを蠻野なりと云ふ、蠻野は無慈悲にして情なしとぞ思ふにやあらん。われは寧ろ斯る觀察をもて無情なりとは言ふ也。人生れて父母なきはなし、年壯んにして妻なきはなし、妻ありて子なきは稀なり。たとひ、野人、毛皮をまとひ、髑髏を腰にすとも、胸中一點の情愛なかりしとまで思ひ僻むる人々の果なけれ。近世の人、姿容を變へ、衣服を更めて、自から稱して文明と云ふ。われは、文明を自稱して自から開化に任ずるもの、既に文明にあらざるとを疑はん。如かず無乃古への天眞にして自から意識せざりし先人をこそ床しとぞ思はんに。

## ○死躰診斷

死したる躰を解剖して生理の學を推究し、之を活者に應用せんとす。人慾に蔽はれたる六根を振り立て、覺束なき感覺を得て、智識を組織せんとす。所謂る尋常世俗の事の錯覺と相合せざる所以、察すべからずや。凡そ人、沒形の學に修むると幽遂に、不動の術に練ると堅確に、無想無念の靈識に覺ると玄妙ならば、別眼自から開け、心耳八方に透開し、宇内の事、至眞、至空に映じ來らんは、宛がら、雲の心なく映じ、水の語なく流れ、落花の自から落ち、鳥禽の何處となく吟ずるが如けん。但だ此の工夫、靜念凝思を要とす、無邪太公の勇猛心を要とす、絶待超越、些の覇氣なきを要とす。

## ○其眠るや一なり

凡そ論議は、事前事後に喧まし。事機正中、當座即決の刹那に豈に論議なるものあらんや。こゝを以て大勢を決するものは、預め論ずるとなし、其の論ずるや暫く閑問題を呈して他の八釜しやを引付け置くのみ。囂々擾々の際、大事早く他の方面に決了せられんが爲め也。既に大事決了せられ、形跡やうやく凡眼に映ずるに及べば、論者則ら其の是非を評し、其始末を探り、其由來を考へ、其事情を統計し、日も亦た足らず。而してかの大勢を決するの人や即ち眠る。或は罵られつ

つ眠るとあり、或は忘られつゝ眠るとあり、而も其の眠るや一つ也。

## ○家庭の大勢

既に大勢を決すと云ふ、必ずしも之を國家の大事にのみ存すと思ふは非なり。誰か一家の事を小なりと云ふ、小事を一世界とすれば之れも亦た大事にあらずや。況んや其の影響する所の天下の大事なるをや。こゝを以て、家庭の處置亦た大勢を決するの時機あり、放任自由、しばらく打棄て置くべきの場合あり。たとひ僕婢出入の數は多からずとも、既に是れ一家に於ける、與衆たらんか。否らざ、主婦たるもの、安んぞ其の政治を輕忽にすべけんや。

## ○李鴻章

李鴻章も亦た人傑なる哉。悠々として迫らず、絶えて恩怨を形さず。大抵其爲す所、愚なるが如く、怯なるが如くして、而も著々として大勢を決す。數年にして後へに瞠若せしむるもの少なしとせざる也。惟ふに彼は既に去々年の戰敗を忘却せしなるべし。而して我國猶は童謡をやめず。童謡猶は可なり、連りに戰功編纂の歴史に忙がはしきに非ずや。

## ○戀愛

戀愛の事を語る今や既に流行となりぬ、既に流行となりて流行を追ふは太だ易からずや。一と度び愛と云はば、たゞ下者を念ふの情と見做し、一と度び戀ふると云はば、たゞ肉慾上の事とさげすみたらん時世は、今大方は過去りしなるべし。初め公々然として戀愛の事を喝破せし人は、いか計りの擯斥を受けつらん、思ひやるだに氣の毒なり。

## ○伉儷の主旨快樂にあらず

初めて室家を定むるの人よ、和樂團欒の文字に眩して、之をもて惟一の目的となすとなかれ。人、安寧幸福をもて主旨とせば、災禍踵つて來る、たゞ義を盡して而して後安寧幸福の自から到るをまつ可きにあらずや。夫れ、伉儷同棲の主旨は、悦喜の爲にあらずして、義の爲め也。もし互ひに他に盡すことを喜こびとせば、幸福は則ち自から見舞はん也。

# 時文

## ○月草

森鷗外著　春陽堂版

我邦に審美學の研究を輸入したるの功に於ては、吾人は正に鷗外氏を推さゞる可からず。鷗外氏が小說類の著譯には、曩に水泡集の出版あり。今は其論文、雜筆を蒐集したるもの之を『月草』と名つけて出版せらる。審論あり、俳文論あり、其他の美術文學論あり、みな鷗外氏が、其博識多才を縱横に切りて廻したるものなり。附するに三木竹二氏の劇評を以てせり、其劇評の綿密なるは、また中々に他の新聞屋流劇評家などの及びもなき處なり。此『月草』千頁の大冊をなせるを見又さきには水泡集あり、また近くは千餘頁の『かげ草』出でんとするを見て、鷗外氏等が常務の餘力を以て、文學に奉ずる事、如何に、勉めたるかに敬服せざらんと欲するも能はず。

## ○日淸戰史

川崎三郎著　博文館版

日淸戰爭が如何に多くの著作材料を以て、川崎紫山に供したるとなるよ。曩には紫山、『日淸海戰史』『日淸陸戰史』の兩著あり、今また『日淸戰史』の著あり。其第一卷既に出版せらる。

## ○海國雙六

春陽堂版

谷口政德氏の編纂にして、畫は渡邊金秋氏に成り、また表紙畫は若林大尉の描く處なり。我邦三百年來、海上の豪傑の偉蹟を綜して、雙六の遊戲中に自から海國少年の士氣を養成せしむるの目的なりといふ。

## ○日本歷史譚 日本開闢

大和田建樹著　博文館版

大和田氏は少年男女の讀本として日本歷史譚を著すの企てあり。此『日本開闢』は其第一卷として出版せらる。其圓熟の筆を以て、平易に日本歷史をものし、なほ附錄に少年の遊戲にも出來べき謠曲を載せたる、少年の讀本には適當のものといつべし。

## ○ひげ男

幸田露伴作　博文館版

露伴子が苦心慘憺の作と聞えたる此作は、其趣俤の、餘りに舞臺を廣くとり過ぎて、肝腎のひげ男が、目立たぬやう思はるゝなれど、作者が甲州武士まつた三河武士の心懷英風を、心こめて描き出して、彼等諸豪傑の風丰紙上に活躍するが如きを觀る

其趣俤をいへば即ちこれ武田勝賴が、馬場山縣内藤等甲州諸老將の諫言を入れず長坂釣閑等の諛言を信じて、信長家康と戰ひて敗北して、諸老將兼て覺悟の通りあはれ英骨を原頭に曝せり。爰に甲州の武士に、其名も後の人に多く知られぬ、笠井大六なる年壯、赤顏、美髯の武者あり、主家の敗績をまき返さんものと、忍びて信長の陣に入り、彼を刺さんとして成らず、捕へられて家康の手により、家康之を家臣に獲んとして、諾せず。勝賴の兵再び起るに及んで、幽室を破りて遁れたりとぞ。篇中には甲州武士の面々は素よりの事、信長も出て、家康も出て、酒井忠次も出で、柳小太郎も出で、扨て〳〵賑はしき事此上なし、しかしかく賑しき中に、女性はたつた一人の玉枝に止めたり。

其挿畫は品がなくて、何の意味もなき事を表したるは、何故ぞや。

附錄に『靄護精舍雜筆』あり、これ露伴が靈覺の見地を示すもの、讀まざるべからず。

## ○龜甲鶴

小栗風葉作　春陽堂版

尾張灘と聞えたる知多半田に、古株の酒造家野杜廣右衛門、その龜甲鶴と銘うつたる諸白は、一時新川の相場をも狂はせしもの。然るに近年不出來の打つゞき、身代は少からぬ響きとなりし處、乘るか反るかの運だめしと、家屋敷不殘質に置きて、二千石釀造の謀をなし、而も内五百石は密造、表向の屆は千五百石としたり。これを杜氏に覺られ、ゆすりにかゝられたるに、廣右衛門びくとせず、杜氏はとめ倉男の面々を解雇したり、然るに倉男の中に野呂と諢名とつたる又六が、此家の娘お杉の容色に心魂を打ち入れて、何卒此娘、我物とは思はじ、たゞ〳〵あやつて一生獨り暮しにさして置いて、そして自分が、眺めたいと思ふ一念より餘の倉男と共に此家を出です、而も哀願强望して杜氏となり、一心不亂に、酒

遺に從事したるぞいぢらし。見事酒も絞り遂せたり、偖て彼密造の五百石檢査官に見現されたるを、又六我が罪に若んさて、桝打擲りて開桶を破りたる心根を、氣狂ふたかさ叱られ、扨て不埒の檢査官彭澤は、見水此密造を見のがし失て、兼々執心の娘お杉の婿に入込むとさなりし、祝言の其夜に又六は之を知りて大に失望し火を入れつゝある桶の中に、怨の一念堪へざるまゝに、跳り込んで果敢なくなれり。偖て鐵甲鎗の銘は、再び關東に淺酒と響を競ひ、野杜の家再び繁盛に赴きしが殳に此家の三不思議さて、今も其土地に名高きは、閉倉の西隅の土間の滞圍に開込一本、不斷の目張堅く封じたるさ、お杉が八十八夜に無縁佛への心ばかりの手向さ、桑園界の久遠が、露姑の念佛拍子さなりさぞ。

小栗風葉が此作「鐵甲鎗」は、蓋し予が作中にて最も推すべきものなり。文致筆力いよ／＼加ふるを見る。此篇の酒造の光景事實を描く處、よく之に通曉したるものならでは、迚も叶はぬ事、餘人に一寸は眞似の出來ぬ事、風葉自身には必ずや深く之を明らめたる處あるならん。風葉由來寫實の筆に密にして、彼「世話女房」の調刺陸さいひ、今また此酒造家さいひ、扨て／＼綿密なるものかな。

### ○十五少年　森田思軒譯　博文館版

佛人ジュール、ヴエルヌ著す處にして、オークランド州、チエイマン校の學生、十四名、夏期休業に、近海航海を企てしに、北ヶ嵐の際失流して、船長水夫の不在中に、海濱流し初めて、終に南米の孤島に、黑人の子一人さ共に都合十五の少年が、種々の困難を舐め、二年の後救はれて本國に歸る勇壯の譚なり。譯事簡潔愛すべし、去かし少年の讀みものさするには、少々堅くるしき所あらざるか。

### ○月夜鶴　麗水作　春陽堂版

赤子を與へる飯大工夫婦が、喪児を拾ひ、育てし處、成長して容顏の美女さなり鶴山家へ小間使に上りし處、多情の主人の思しものさなり、夫が爲めに、細君の嫉妬の炎燃ゆる折檻に敲かれて、一生此の廢物にせられ、償金は取つたが、其娘は、本當の親の災氣を受け居りし爲め、其親が因さなりて相共全く盡じて、非常に貧きものさなり了りぬ。これを厭ひて自ら身を不忍池に投じて死し、彼夫を極貧に陥りたる一の悲惨譚なり。麗水の多能なる、或時は漢六に擬せんさしまた或時は弦齋に擬せんさし、また此度は柳浪一派に擬せんさして、而して擬する度毎にこれさいふ出來榮なし、いつも物足らぬ心地ぞせらる。去かし其何種の文體でも結構し得らるゝ、麗水子の多能には驚く。

### ○段々染　柳浪作　春陽堂版

小石川柳町にお市婆あり、娘三人あつて、姉は兎角金にしたがり、總領娘は醫者の身の、さる高等官に根引せられて、其奥方さなり、季娘は銘酒屋の女さなりて情夫さきち狂へり。仲娘幼少より巣鴨在へ養女に遣し置きしに、これも金にしたさに、斥養のさりやりのなきを幸に、奪ひ返して、銘酒屋奉公して、よい御客を取らせんさ土たる處、其仲娘は之を否んで、或夜危き場を逃れ、姉に救はれて、引取られしが、季娘はまた、母の殘忍に堪えきれで、上州へ飛んで仕舞ひ、其留守にお市はコレラに罹りて死したりさいふ話。柳浪が此頃の作さしては深刻さ加減も少く、文の妙も足らぬが如きも亦甚だ讀むべきの一作作なり。

新小說第二卷第一號の批評次號

---

### ◎女學雜俎　廿九年十二月下半期

女子さ著作（山本良吉）　日本人第三十三號
犯罪さ女子さの關係　國民の友第三百二十八號
文學に映ぜる米國婦人　同
小學校女教員の俸給（田中太郎）　統計學雜誌第百八十五號
女子教育一斑（三十一）三輪田眞佐子　女鑑第百二十三號
弘道會の婦人演說（谷干城）　婦人弘道叢記第二十七號

---

さもかくも風にまかせてかれ尾花
こからしやすぐに落付く水の月
千代

---

## 片々

◎明治三十年來　此年は政治社會、宗教社會、經濟社會、教育社會、文學社會、等凡ての社會に於て大運動のあるべく見るが中にも、女學界は必ずや、此年冲進の勢力を積んで一大振作を見んとするか。

◎戀の句　殘花宗匠、俳句の戀句なしてしかも神聖純潔なる意味にて詠み出でんことの願はしきよしをいひ、古今集以下の和歌はもとより、芭蕉、其角、嵐雪などの戀句の戀は、神聖ならずして、むしろ惚れるといふに近き下等の聯想を起すべき人情をいへり。もし平民的短詩の句にして、戀愛の方面に十二分の趣味を與ふることなくんば、俳句は二十世紀の文運に伴はず、俳人即世捨て人、すれ者、ソゲ者、道樂者の意義を去ることはかなふまじ。戀に愛の新義をかへ、惚れるに愛の意味をかへなば、世に戀句ほど尊きものはあらじといへり。

◎小學女教員の俸給　に就きて田中太郎氏が明治二十七年末の取調べによるに、本科正教員俸給の最多額は北海道にて二十七圓、同最寡額は新潟、青森、山形、石川、鳥取、島根、廣島、山口、德島、香川、佐賀以上十一縣の五圓。同科准教員俸給の最多額は、群馬にて十二圓、其最寡額は、山梨の一圓なり。また專科正教員俸給の最多額は福島にて十三圓、其最寡額は、千葉、和歌山にて二圓。同准教員俸給の最多額は神奈川の十五圓、其最寡額は岩手、青森、三重、愛知、岐阜、鳥取、香川、愛媛、大分、宮崎十縣の一圓なりといふ。而て全國を平均して本科正教員俸給の最多額は十四圓、同最寡額は七圓二十二錢、同科准教員俸給の最多額は六圓九十五錢、同最寡額は三圓四十五錢、專科正教員俸給の最多額は七圓八十錢、同最寡額は四圓八十六錢、同准教員俸給の最多額は六圓二十二錢、同最寡額は二圓三十一錢なりといふ。尤も此統計に算入したるものは、公立小學校に奉職するもののみなり。

◎大須賀亮一氏と小西信八氏　大須賀氏は白痴教育視察の功を了へて客臘歸朝せられ、王子孤女學院の教育組織は、やゝ其趣を變する所あらんとし、また東京盲啞學校長小西信八氏は官命を帶びて、盲啞教育、白痴教育視察の爲め歐米へ洋行す。吾人は彼可憐なる我邦の不具者の教育に關して、兩氏の熱誠に俟つ處、甚だ多し。

◎小兒研究　我邦にても小兒研究の事やうやく盛になり行けるが、米國にての小兒研究の如きは、非常の流行にして、所々に其目的の會起こり、多くの著書は陸續として出版せられ。また雜誌さへ發兌せらる。米國にて小兒研究を創唱したるものは、クラーク大學の長スタンレー、ホール氏にして、目下該研究に關して有名なる學者には、プリンストン大學教授バルドウイン、エール大學教授スクリプチュア、紐育教師學校々長ハルヴイー、シカゴ師範學校教授、パーカー、ウースター師範學校々長ラッセル、イリノイス州立師範學校教授ヴアン、リーウ、紐育州學位監督スキンナア、バフアルロ教育學校教授オシエア、また小兒研究運動の起動點たるウイノア師範學校々長シエバルド等なりといふ。

◎女學士　獨乙大學に於て女子に理學學位を授與せるもの往々あるが、フライブルヒ大學に於ては、米國婦人にして動物學を研究したるものに、ドクトル、フイロソフヒーの學位を與へ、ゲッチンゲン大學には、英國婦人にして數學を研究したるものに同學位を與へ、ハイデルベルヒ大學にては、獨乙國婦人にして、數學を研究したるものに、これも亦同學位を與へたりといふ。而して獨乙の外瑞典及び那威にても、女學生に學仕を授與するの制を設け、千八百九十四年に於ては十二人の女子にドクトルの學位を與へたりといふ。

◎瑞西大學の女學生　同大學は千八百九十五年に於て學生の總數三千八百十三人にて、其中六百人は女學生なりといふ。

◎新選女大學　撰定成る。其撰に成りしもの果してよく、新日本女子の讀本たるに適するや如何たゞ思へ其撰者たるもの一人加藤博士を除くの外は、みなこれ儒學和學の人なる事を。

◎野中千代子　新選女大學の一等に撰せらる女史や富士登山に、婦女勲鑑の名を成し、芙蓉日記に文名を成し、いままた此撰に當る。其著もし万代日本婦女子の經典たるを得ば女史が光榮無上ならん

## 時報

### ◯婦人の行賞

廿七年戰役に付婦人に對する行賞は去年十二月二十五日を以て左の通發表せられたり。

叙勳七等授寶冠章（百五十圓下賜）　高山みつ

同七十圓下賜　新島やゑ

同五十圓下賜　大久保てる
大越　たま　大内　かめ　今井　わか　高木　はる　川村　もと
俵野　いは　秋間　たみ
敍勳八等授寶冠章(三十五圓下賜)
藤井　よし　石毛　ちよ　三好　きく　中﨑　ひで　森川　かく
香椎　つれ
同(廿五圓下賜)
金三十五圓下賜　皆吉　ちか　伊藤　きん
金三十圓下賜　吉村りやう　竹中　すゑ　田中　もと　山室さだ
金廿五圓下賜　大迫　とき(外三十六名)
金二十圓下賜　坂元　柳野(外五十名)
金十五圓下賜　井手　ます(外八十八名)
金十圓下賜　高島　りく(外五十三名)

以上は皆これ赤十字社救護事業に關する婦人なり。因に云、――同事業に從事したる救護員一同(看護婦共)は、去年夏赤十字社より、終身會員章、または指輪、金員等を附與したり。

◎王子孤女學院慈善市

小鹿島筆子女史等が王子孤女學院の爲に慈善市を開くの趣旨を發表せしに毛利、近衞兩公爵夫人、黑田、鍋島兩侯爵夫人、大村伯爵夫人、花房、三宮兩男爵夫人、濱尾大學總長夫人、牧野文部次官夫人等同情を寄せらるゝ人多く、院長大須賀亮一氏は去年十二月二十二日を以て歸朝あり、四月頃には慈善市を開くの計ありと云ふ。

◎萬朝報の「新選女大學」の當選

「萬朝報」が去年四月十一日を以て、新撰女大學の懸賞募集をなせし以來、多くの投稿につき、加藤弘之、福羽美靜、棚橋絢子、木村正辭、三島毅氏等選定中の所其結果として、第一等野中千代子(賞金百圓)第二等山崎貞夫(賞金二十五圓)第三等芳川春濤(賞金十圓)第四等かやの舍、第五等栗の舍、第六等大塚信明、第七等富樫村雨其他なほ賞金を得たるもの數編ありといふ。野中千代子は野中千兵氏の令閨にして、嘗て「美容日記」の著あり。同新撰女大學は一月十五日を以て出版せらるべしといふ。

◎津山女學校

基督教を以て設立せられたる美作國津山町の女學校は本年一月五日を以て開校せらるべしといふ。

◎貞女の表彰

三重縣伊勢國三重郡富洲原村伊藤孫七養母
ロ　ゆ　き

資性貞實妙年にして同村伊藤孫左衛門に仕へ尋て伊藤孫八に嫁す生計貧困既にして夫疾病に罹り且明を喪ふ乃ち夜作晝賈病夫を看護し幼孩を鞠育し艱楚備に嘗め衣帶を解かざること累歳適々其主産を失ひ一家離散幼孫敬太郎の賴る無きを憫み自ら之を哺乳し且債を代償し長じて育するに及び衣食を給して其祀を存せしむ今や家産稍裕なるも敢て暇逸せず女子を督勵して行を正し業を勉めしむ此操守四十八年一日の如し闔家雍睦郷里風化す洵に奇特とす仍て明治十四年十二月七日勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰す

◎孝女かつ子　香川縣寒川郡長尾村大字長尾四百七十一番戸平民岡安桑吉妻串田かつは、其姑に仕へ、孝養至らざる所なきを以て、同縣知事は其孝貞を表旌して、金十圓下賜せられ、又同村長尾高等女學校にては自ら請ふて其校舍を貞婦表旌の式場に充てたりといふ。

◎乃木總督の母堂　は總督に强請して渡臺ありし後間もなく病に罹られ、十二月廿七日遂に病歿ありといふ。

◎婦人貯蓄會　備前國邑久郡豐原村大字濱に於ては、一昨年十一月高津庄吉氏の發起にて、婦人貯蓄會なるものを組織し、二十歲以上五十歲迄の婦人に限り、會員として、每月二十日を會期と定め、金五十錢宛を持寄り、貯蓄せしが昨臘の結算期を於て總結算を爲したるに、其金高七百二十圓に上り居れりといふ。

◎山谷ひさ子　久しく米國に留學して大學を卒業し、近頃香蘭女學校に教授せられし同女史は去五日頓死去せられたり。

◎婦女研究會　岡山の各女學校教員各作法女教員其他各地の同教員は去年三月以來時々便宜の地に集會して各自の意見を述べ、女子教育に關し、談話せしが、更に婦女研究會と稱して、裁縫及作法等總て女子教育に關する事項を研究することゝし、今一月には岡山市に會合して、會則等を定め實行する筈にて是迄の談話會員四十餘名ありと。

◎婦人の義捐　横濱婦人會員たる中野、大谷、渡邊、箕田、原、國田、梅田等の各夫人主唱者となり、此程大火の爲め、悲境に陥りたる、津久井郡吉野驛の罹災者へ應分の義捐を爲さんとて、有志の婦人へ勸誘の準備中なりと。

# 孤女學院の事

府下瀧の川孤女學院の事は、本誌の前々號にも記載せしが、近頃、新聞帋上に同院の事を報道するもの次第に加はり來れるぞ慶すべきと也。左に其の二つを轉載す。中に大須賀君歸朝の時期に關して記したるは誤まりにて、同君は既に去月廿二日無恙歸着せられたる也。

## ◎孤女學院大須賀氏の篤行 明治廿九年十二月廿三日時事新報

東臺の北、瀧の川の邊に建てる孤女學院の設立者大須賀亮一氏の行狀を聞くに其篤行偉蹟靄然として自から人を薫化するに足るものあり氏が女子教育に其一身を委ねんことを思ひ立ちしは今より七八年前の事にして始めて築地某女學校に通ひしが其間北王子より往復六里の道を歩行し毎曉草鞋を穿ち提灯を點して家を出で教授の際も至誠盲外に溢れ献身の熱情掬するに餘りありければ頓て推されて校の全權を托せられしとなん其後氏は下谷四黒門町に一舍を設け二人の孤女を養ひしを始となし愛知岐阜震災の際無告の遺兒を收容して遂に現在の事業を成し特種の教育法を探究して實地の應用を力むる程に成蹟頗る好良にして院兒は皆普通教育を受け師をば師と敬し父と親しみ校塲は即ち一の家庭の如く觀る者をして覺えず感歎の聲を發せしむるといふ其間の辛酸想ふにも餘りあらんに氏は尙ほ此を以て足れりとなさず特種教育法實地視察の爲め去る四月十八日米國に渡りしに氏の篤行は早く已に万里の外に聞え各州至る所の米人は爭ふて氏を迎へ旅費其他の費用は悉皆彼方にて辨じ吳れ且つ有志者の會合をなすべければ是非來會あれかしと乞ふ者多きを氏は答へて故國に六十餘人の家族(孤女を指す)を殘して出來れる身なれば自己の私用の爲めに費すべき時なきを如何にせんとて辭を低うして之を謝絕し斯くて六月盛暑の時を顧みずマッサチューセット州に有名なるフアナード博士の白痴學校を視察し傍らハアヴアード大學及びボストン市公立圖書館に就て氏の目的に關する一切の書籍を調査し終りぬ氏が其頃の信書に曰く食事と就眠の外は讀續け書續けなり朝食は九時なれば其前六時間は勉強も出來申候と其學に勉むる此くの如し扨右ボストンなる圖書館は一切館外に書籍を持出すことを禁ずるのれば氏はケムブリッヂより日々往復八哩の道を通ひけるを博士ケンデル氏は痛く其熱心に感じ館長に面會して常置委員開設を請求し其議決を經て氏に許すに特に書籍携帶の事を以てしたりとなり此外氏が米人の歡待を得たる光景は一々枚擧すべくもあらず要するに氏の篤行誠實は至高至優の事業に發して之を成すに堅忍不拔の氣象を以てすることなれば氏が歸期の日は目を刮りて待つに足るものあられとて氏の知友は今等より指折數へ居るといふ。

## ◎王子孤女院と院長大須賀氏 明治廿九年十二月廿九日國民新聞

大須賀亮一氏が專ら慈善の趣旨を以て去る廿四年中私財を抛て創設なしたる王子孤女院は目下六十餘名の院生を有し孰れも氏を父とし慕ひ氏も赤子として之を愛育する事茲に數年其間柄の親切なる見る人氏の篤志に感動せざる者なし氏は尙ほ今の組織を以て滿足せず進んで良法を研究せむ爲め去る四月十八日米國に渡航し現に彼の地に在りて專ら調査に從事し居る由なるが今度有志の人々は寄附金を募集し慈善事業を助け其志を成しめむとて其趣旨を發表せしに毛利、近衛兩公爵夫人、黒田、鍋島兩侯爵夫人、大村伯爵夫人、花房、三宮兩男爵夫人、濱尾大學總長夫人、牧野文部次官夫人等同情を寄せらるゝ人多く氏は來一月歸朝する豫定なるを以て三月頃には慈善市を開くの計畫ありと云ふ今大須賀氏が慈善事業に於ける經歷を聞くに大に貪夫を戒むるに足る者あるを以て左に其の大畧を掲ぐ

大須賀氏は今を距る七八年前女子教育の上に就て大に感ずる所あり一生を斯道に委ねむとの決心を起し先づ築地の某女學校に入りて教授の任に當りたるが當時氏は王子の端より日々築地の海濱迄草鞋掛にて往復六里の道を歩行し朝は露を踏み提燈を携へて家を出で拂曉市內知人の家に就て正服に更へ登校するを常とし校具を執りて終日倦む事なく其教授の道に於ても至誠盲外に溢れ生徒も之に化せられて則に違ふ者なく助教師亦氏の風に和せられて忠實職を守り氏の報酬は總て校資に寄附して一錢を身に着けず献身の熱情は人をして感歎に堪へざらしめたり去れば同校の監督たるヘーヤ氏米國より來朝し此景狀を一見して深く氏の篤志を歎賞する處あり直に校の全權を擧げて氏の手に委ね其影響は延て外國人に關係ある各


四一

地方の女學校に及びたるを以て外國婦人の中には往々怨を氏に抱く者さへありしも氏の至誠を知るに及びて漸く同情を表し今は氏の創設に係る王子孤女院を贊稱するに至りしと云ふ

氏は其後下谷西黑門町に一家を借受け二人の孤女を養ひしを始めとし明治廿四年愛岐震災に當り其慘狀を見るに忍びず私財を抛て此の院を設立するに至れり去れば當時氏が尾濃地方より救ひ來りたる孤女十四名あり中に本年六歲になる者は震災の當日積木に撃たれて手足を傷り終に死亡したる姙婦の月足らずにて產みたるものにて生後十五日を過ぎたる頃氏が自ら懷にして連れ歸りたるなり其後東北地方より連れ來りたるものゝ由にて本年十歲計りなるは情なき繼母の手に掛り具さに呵責の苦辛を嘗め將さに餓死に瀕したるを救ひ來りたるにて繼母が無慈なる呵責の名狀は今尙ほ其跡痕を留め見る者をして酸鼻に堪へざらしむる者あり其の他僅かなる金に替へて支那人の手に渡されむとせる者等孰れ薄命兒ならざるはなく中には不具又は白痴の者もあり今は積りて六十餘名に達し氏は一週間一度宛醫師を迎へて診察せしめ夜間は幾度となく自から起きて幼兒の模樣を見廻らるゝと云ふ氏は此の程特種教育法の實地を視察せむ爲渡來せしに際て此の院の事に就て氏の名を知れる未見知人又は團體より招待を受くる事多きも何分家には六十餘人の兒女を殘す身なれば時と役とに限りありとて一回も其招に應ぜず氏の利益に志なき之を以ても知るべしとて尙更感ずる人多しとなり去れば氏の米國に在るや其の目的を遂げしめん爲にとて心を盡し中には滯在費用をさへ負擔すべしと云ひ出づる學校さへあり又ボストン市公立の圖書館は館外に書籍を持出すを出來ざる規則なるを以て始めは「ケムブリツヂ」の客舍より日々往復八哩の道を通ひたるを博士ケンデル氏偶ま傳へ聞き氏と同道して圖書館に至り館長に面會し特に帶出を自分の名を以て請求し其議決を經て氏に特許券を渡さしめ爾來館外に書籍を携帶する事を許され尙同館になき書籍は新に購求して用に充つべしと申出られたり氏が諸州を遊歷して白痴學校等を視察せるに諸所に於て一方ならざる優遇を受て殊にミネソタ州「フアリーボール」の白痴學校にては校長の姉某の如きは自ら馬車を驅て氏を伴ひ白痴學校へ往復したりと云ふ此の如き類枚擧に遑あらず至る所深き愛敬を受くるは一には今や氏が早く氏の事跡を彼の國の新聞雜誌に寄せ又三十餘年間我國に在學せるウイリヤムス氏の曾て其本國に歸られたる時人每に氏の事跡を語りたると現監督マキム氏の渡米に先だち各州の病的兒童教育所に懇篤なる紹介狀を寄せられたるに由ると雖ども抑も美德の發揚する處自然の反應と云ふべし。

此他、「日本」(十二月廿九日)、あづま新聞(同上)等にも同樣の記事あり。

## 白痴の子を愛護せらるゝ父兄に告ぐ

大須賀亮一君、米國に白痴教育の情狀を視察して歸朝し、吾人に告げて曰く、至れる哉、此の種の教育者の信愛や、人をして其の周密なる熱愛に感泣せしむ、不肖何んぞ之に倣ふに堪へん、白痴教育の事の如きは、偏へに恐懼して只だ其の至難なるを歎ずるのみと。但し孤女學院内に準白痴の子あると少なからざるをもて同君は實に白痴教育の實驗に志ある也、之より徐むろに此に着手せんとして、先づ白痴の子二三名の教育を托せられんことを需めらるゝが如し。聞く所によれば、男女、孰れを問はざれど、可成くは女性を擇び、年齡は十二歲以下の人を望まるるよし也。世上可憐の兒を愛護せらるるの父兄ありて若し此の事に意ありとせば、王子瀧の川孤女學院内の同氏に就きて直ちに問ふ所あれよ。

女學雜誌記者　白

# 明治女學校圖書寄贈報告

## 第二回

一 日本社會宗教（三冊）　各一部　原田光二郎殿
一 和文教科書●神皇正統記　一部　井上直子殿
一 於陽叢書　一部　池田つき子殿
一 日本語史　一部　菅せい館殿
一 高等書帖　一部　十文字大元殿
一 給畫帖　一部　内田芳兵衛殿
一 文學具折々●梨園の落葉（八冊）　各一部　坪内雄蔵殿
一 地質學教科書　一部　横井又次郎殿
一 學校管理術●新教育學●内外教育史●路加傳註釋　各一部　中村猶子殿
一 小學唱歌集●中等唱歌集●正續文章軌範●十八史略●讀史遺何
學術錦●歷史一册讀●修身小學●植物啓蒙●十簡物學●地文
學●動物小學●植物小學●化學教科書●心理學●地文學附
圖●萬國歷史●文法口授●孟子●漢文抄●文語●竹取物
語●土佐日記●和文教科書●家計簿記●和文學史●唐詩選　各一部　中村詩子殿
一 舊全書●日本歷史　各一部　吳殿
一 安心立命（二冊）●四人の人（三冊）●福音史●新約全書●教
一 略十條●神と自然との關係●人生終極之話●闇黒之試●神
人慈愛論　各一部　植村正子殿
一 和歌受用●生花秘傳書●北海道農業手引草●琉球のフロラ
●海濱の嬉戲●物理學●悲劇談●植物之話●化學初步　各一部　宮部金吾殿
一 通俗地質學　各一部　原忠美殿
一 聖書の眞理●世を渡るたづきの風琴●日本歌學全書●小さき
題理及其抱人●和文教科書●小學珠算全書●庭のおしへ●
家庭の友●三躰千字文●小供のため　各一部　山田みき子殿
一 和文教科書●基督教約說●西國立志編●スウヰントン（三、
四讀本）●算數學初步　各一部　増田宮子殿

---

## 孤女學院義捐廣告

本號女學雜誌社は從來の欄内に揭げられたる主旨により、瀧の川孤女學院へ物を寄せんとす、仰ぎ願ふらくは、四方の仁人君子の規定によりて義捐をたまはらんとを、

一 金圓は本月より明三十年四月三十日迄の間に、物品寄贈
一 善市用品は明年三月十日までに、主唱者へ宛て寄送相成度候
一 金圓又は物品受取人差出し候節は持參の符號御照し上は
其の上、御申込書と御引換現品御渡し給はる度候
一 慈善市開會の時日及び場所は追て御通知可申上候

明治二十九年十一月

東京麴町區五番町十六番地　小鹿島筆子
小石川區水道端町五十三番地　添田香子
麴町區下六番町六番地　吳久美子
京橋區新榮町七丁目廿六番地　小宮珠子
赤坂區傾坂町五番地　元良よね子

---

毎月二回發行に改め定價一冊金五錢五厘に直下げ

# 日本の家庭

每月一日十五日發行●定價一冊五錢五厘(郵稅五厘)◎半年分(郵稅共)七拾壹錢◎一年分(仝)壹圓四拾貳錢◎爲替振込は飯田町局

## 第二卷第一號　一月一日發行

口繪 新年の家庭 挿繪 大小十餘 社說 三十年の一月 ○談話 杉亨二翁の談話(まごかご)○史傳 木村長門守の妻(眞野蛙生)○教育 面白き話(一)(古毛利)家庭育と嫁入○白き朱(大竹紫竹)○家事 冬期と嫩者の病(紀乃利)すぎた下女(むらさき)○物の發明 物價の比較 不用品の値段 だいどころ(○)兎毛(○)雜錄 若水(其二)鶴峯 句 佛問答 數十件

附錄 頌ご心(矢仲生)(平の)(田中夕風) 古羽(…名氏)下ゆく水(…)

發行所　日本の家庭社
東京市麴町區富士見町六丁目七番地

---

# 女鑑

明治三十年一月五日發行
第百二十四號

女鑑●新年を迎へて 論說 年のはじめの心なもて平常の心さすべし……●石搏千弥●吉夢……坂本三七郎●女子教育一斑(三十二)……三輪田眞佐子 史談 和泉三郎忠衡の妻……鹽井ふく子●孝婦いさ女の事……永石薺風 家政 たちぬひ(續)……四山たい子●造花(十二)……大林●だいどころ……あゝま、學園 新古今和歌集講義(四)……鹽井正男●人妻大鑑諺解●漢文學講義(二)……伏見藤三郎 漫錄 國字孝經(三)……烈女(五)……弘一郎 橋之家主人●おきの玉藻(蘇樹先生年譜)……永石德文●紋帳圖式綱目(續)……井上賴文●世の中の●東京廿四景(十四)……蓬生舍女史●朴平(つゞき)……白魚女史 文林 歌數十首●長歌 金鶏勸學……藤井行麿●新躰詩 さよ時雨……鹽井正男 雜報 時事數十件 教の庭 兼題 歌數百首 文數十章 ほかくさ〳〵

附錄 ◎さる貴顯御染筆和歌色紙形刷物 ◎女鑑總目錄

毎月二回 五日二十日發行
定價壹册拾錢 拾貳册(半年分)一圓 全國無遞送料

發行所　國光社
東京京橋區築地二丁目二十一番地
(電話本局八八)

---

鈴木弘恭大人講述

第六版

# 百人一首講義

附錄　小倉のてびき

正價金廿八錢郵稅四錢

本書の講義の甚だ叮嚀親切なる、又其釘裝の頗る清楚なるは、世上既に公評ある處にして、版を重ぬると、亦六回に及へり。小倉山莊の障子に、百人一首を撰書して、幽寂を味はへりし、定家黃門の樂趣を知らんとせば、此講義に就くに若くはなけん。

發賣所　女學雜誌社
東京麴町區下六番町六番地

日本宗教界
評論の評論

# 日本宗教

十二月廿日刊行
第二巻六號要目



一冊定價八錢郵稅五厘、六冊前金郵稅共四十八錢
見本は九錢を要す

發行所　東京麹町區下六番町六番地第七號舍　日本宗教社

## ◎歌詠募集

◎季、雜、戀、其題は何にてもよろし。短歌今樣ともに、有志の投詠を待つ。
◎投詠ありたるものは、三宅花圃女史の撰を乞ひ、其秀逸なるものを掲ぐ。
◎所々の歌會の兼題、即題の撰も入りしものは、其儘撰者の名を附して掲ぐ、たゞし天地人の點あひたるものに限る。
◎寄詠は凡て本誌毎月十日發行に載す。

## 巖本嘉志子英文集

一冊正價六十錢
郵稅四錢

右英文集巖本嘉志子の肖像(アートタイプ)明治女學校々舍及學生の圖(銅版)、傳紀等を添へて出版せり、有志者の購讀をまつ。

發賣所　東京　女學雜誌社


明治廿七年一月十四日内務省許可
明治三十年一月十九日印刷
明治三十年一月十日發行

發行兼編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　根岸高光
發行所　東京市麹町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍第一工場　(電話十九番)

明治廿五年三月十五日遞信省認可

明治廿五年三月十五日遞信省認可

（四